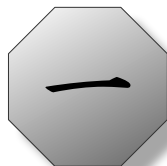


黄金の船、 たどり着きたる先



麦（穀物P）

目次

第一章	Trial #248: 最後の鍵との出会い	4
第二章	ゴールドシップ、七百年目の昔語り	60
第三章	チーム結団	88
幕間	GCC (ゴールドシップ・クルー・クラブ)	118
第四章	チーム命名・『自重』	130

第一章 Trial #248: 最後の鍵との出会い

(Trial #248 Started.)

1 一人目、名を知らぬトレーナー

三月初頭、晴れ。今日はとりわけ心地良い暖かさで、一日中ひなたぼっこでもしていた気分だった。しかし、新年度の生徒入学を控え、トレセン学園——正式名称は日本ウマ娘トレーニングセンター学園、各地方の同様の組織と区別する際には中央トレセンと称さ

れることもある——の教職員は多忙を極めていた。自分も先ほどまで大量の書類を片付けていて、ようやく一段落ついたところだった。

中央トレセンでトレーナーとしての経験を積むこと八年。担当した子はみんな重賞で勝ってくれて、一人はGIで三着に入るところまで活躍してくれている。自分もこの春・新年度からいよいよ本格的にチームを組んで指導していく立場になった。ちょうど今年度までのチームメンバーが揃って卒業し、一時的に指導担当の生徒がいない状態となる。来週からはトレーナーがまだついていない子たちとトレーナー陣とのマッチングを兼ねた選抜レースが始まるので、どのようなコースで活躍していく子を見ていくべきかを考えつつ、学園内を散歩していた。

今は授業日程的には春休みではあるものの、トレーニングコースには生徒達が数多くいてとても賑やかだった。トウインクル・シリーズのレースは、年末年始を除く毎週末に設定されている。すでにデビューした生徒達、これからメイクデビュー戦に出ようとする生徒達は、彼女達のトレーナーとともにトレーニングに励んでいた。誰しもが一流のアスリートにして国民的アイドル、あるいはその座に就くことを目指す子達だ。生徒にとってもトレーナーにとっても決して楽な道ではないが、栄光を目指して心身を研ぎ澄ませせて

る。こうした真剣勝負の空気がたまらなく好きだった。

三女神さんめがみの像のところまで来たとき、傍らかたわの噴水のところに制服姿の生徒が座っているのが目に入った。学園に在籍している生徒の中でも屈指の長身で、もしかしたら最も高いかもしれない。髪の色は透き通るような銀色にも見える。おそらく芦毛あしげだった。プロポーシオン……を具体的に語るとセクハラトレーナーとして学園最強の守護者たる理事たづな長秘書なせきに成敗される可能性があるが、それはさておき――

彼女以外の光景がすべて背景に後退し、その神々こうごうしい姿に引き込まれた。

これは運命だと、柄がらにもなく思った。

視線を動かすこともできずに固まり、いつの間にか呆ほうけてしまっていたようで、彼女が

こちらに近寄ってきたことに気がつかなかった。

「なあ」

「……………ハッ！ すまん、気がつかなかった」

彼女はそのまま密着しそうなくらいに距離を詰め、自分の顔を覗き込むように見ていた。完成された美貌は暴力的ですらあるというのは、まさに今このことを指すのかもしれない。

「アタシに見とれてたのか？」

「ああ」

「即答だな」

「本当のことだしな」

怪訝そうな顔をしている彼女を改めて見ると、目に入ってくる彼女を構成する存在すべてが整っているという、語彙力が失われたかのような感想しか出てこなかった。ちらりと脚の見える部分を確認しただけでも、筋肉のつき方がいい。制服の上から推定できる全身の筋肉のつき方も大変理想的だった。……などとトレーナー的御託を並べてみたけれど、本当に引き込まれたのはたぶんもつと下世話な部分だったのかもしれない。

「女神様だって嫉妬しとするくらい美しいだろ？　ちなみにどこに見とれてたんだ？」

「顔、髪、む」

「む？」

うっかり口からもれかけた言葉を飲み込む。これを聞かれてしまうと今夜はトレーナー寮で軟禁されて、明日には警察からお迎えが来る。彼女はこちらを見て、そしてつい無意識に動いてしまった自分の視線に気づき、それからニヤリと笑った。

「ふうん？　そっかそっか」

彼女はどこからともなくスマートフォンを取り出して何やら操作し、そしてもう一度こちらを見てニヤリと笑った。

「もしもしたづなっち？」

「待ってくれ頼む俺が悪かった！　まだ死にたくない！」

「冗談だって、へへ」

彼女がこちらにスマートフォン画面を見せる。そこには謎の砂漠の写真こそあったが、特にどこかと通話しているような表示はなかった。彼女はこちらの反応に満足したのか、心底楽しそうに笑った。その屈託くつたくのない笑顔も素敵だった。

「今どき珍しいな。ウマ娘相手にアスリートの魅力をまくし立てる脳筋変態トレーナーばかりだからよ、初対面で面食いみたいな感想を言ってくる奴なんて久々だった。たぶん三百年ぶりくらいだ。しかもトレーナー歴が長そうなのに、もろセクハラで訴えられかねない単語まで飛び出しかけてたしな？」

「いや、あれは『無駄のない筋肉』と言おうとしたんだ」

「嘘の証言は法廷で不利になるぜ。視線が別のところに一点集中してたのはお見通しよ」

「そそそそんなことはないぞ？」

笑顔の成分に再びニヤニヤした、からかうようなものが混じった。バレテラ。このままでは教育者のはしくれとしての威厳いげんが崩壊してしまうどころか、本当に署からお迎えが来てしまう。

「ならなんでたづなつちの名前を出した時にあんなに取り乱したんだよ」

「条件反射、だな」

たづなさん——理事長秘書にして学園のすべてを知る超人。新人トレーナー時代から大いにお世話になっている。もちろん怒られたことも数知れず。今でも彼女の名前を聞いたり、お呼びがかかったりすると身構えてしまう。もし自分が生徒に対してセクハラを働い

たと通報されたら文字通りすべてが終わる。その恐ろしさに関する言い伝えは、過去にいた悪徳トレーナーを殲滅し、二度と同じような輩が現れることのないよう戒めるには十分過ぎるほどだった。

「まあいつか。正直なオッサンのことを信じてやろう。もし本当のセクハラ野郎だったら蹴り飛ばしてたづなつちに引き渡せばいいだけだしな」

「お、おう……」

彼女の言う事は本当だ。ウマ娘のパワーをもつてすれば、悪しき人間を無力化することなどたやすい。成敗されることのないよう肝に銘じることにした。

「じゃあな」

彼女が立ち上がり、颯爽と去ろうとする。その背中に慌てて声をかけた。

「あの、君の名前は？」

「えっ？」

不意に立ち止まりこちらを振り返った彼女は、うっかりシロナガスクジラを一本釣りしてしまったかのような表情を浮かべていた。

「本当に知らないのか？」

「ああ、知らない」

彼女の表情に信じがたいものへの困惑、あるいは恐怖が浮かんでいるように見えた。

「いや……アタシが自分で言うのも変なんだけども、アタシはトレセン学園の『問題児』
だぜ？ 知らない方がモグリつて言われるくらい」

「全く覚えがない」

「マジ？ アンタ本当にここで八年仕事をしてきたんだよな？ 記憶喪失つてわけでもな
いんだよな？」

「確かに八年仕事をしてきているし、記憶喪失だと言われたことはない」

そう、八年間のことはあらかた覚えていてのに、本当に彼女のこととは心当たりがない。

「こんなことがあるわけ……ひよつとしてここはみんな知らない、いや、でも他の連中には
きちんと『アタシ』が過不足なく記憶に差し込まれていた。となるとこのおつちゃん
が状況を打破する特異点に……」

「どうかしたのか？ 急に考え込んで」

難しい顔をして何やらつぶやいていた彼女が不意にこちらに顔を近づけた。そこには先
ほどまで無かった、何かに縋^{すが}るような表情が少し混じっていた。

「なあおっちゃん、アタシのトレーナーになつてくれよ。もしトレーナーになれなくても、時々ちよつと話す時間がほしい」

「君のトレーナーか……わかった。引き受けよう」

「即答か！」

「ちょうど担当がみんな卒業して、一から新しい子を探して勧誘しないとイケないところだった。……あと、見とれるくらいに君が気になるからな」

「へへ……でもありがたいぜ」

先ほどの不安げな表情が全てかき消えた満面の笑顔を浮かべ、彼女は高らかに名前を告げた。

「アタシはゴールドシップ。よろしくな、えーと……」

「俺は白江しろえと言う」

「よろしくな白江のおっちゃん！」

「よろしく」

新年度の新しいチームメンバーのひとりが決まった瞬間だった。

2 二人目、パートナー、恋人、あるいは祖先

ゴールドシップについて同僚のトレーナーや基礎トレーニングの担当教官に尋ねてみたところ、みんな揃って自分がゴールドシップのことを知らなかったことに仰天していた。いわく、あれほどまでにあらゆる意味で規格外な存在を知らない中堅ちゅうけんトレーナーなど、本当に記憶喪失になっているのではないかと。

「いやまさか、お前がああ『悪夢の女神様』を知らなかったとはな……からかいも何も抜きにして、マジで病院で診みてもらった方がいいかもしれないな」

この八年間一緒に仕事をしてきた同期から本気で心配された。

「でも本当に覚えがないんだ。俺にとつてはまるでゴールドシップが急にそこに現れたみたいな感じになって」

「もしかしたら本当にそうかもしれないな。俺や他の人ら全員にはゴールドシップが昔か

らいるように記憶されていても、実はそれは改竄かいざんされた記憶で、お前だけはその影響を受けなかった、みたいな」

「まさかな」

それはさておき、同期が説明してくれたゴールドシップについての逸話いっわは次の通りだった。入学式当日に突如美しい長身のウマ娘が現れ、学園にいた人全員が仕事をほっぽり出して見に行つたという。その日はお嬢様みたいな立ち居振舞いで、同じクラスになつた子たちをことごとくオトした。でもその翌日から破天荒はてんこうな活動を始めて、初日のお嬢様のイメージとのあまりもの落差でクラス全員が保健室送りになつたとの話もあつた。さすがに全員というのは盛られていそうだが、六、七人くらいは気を失つてベッドの世話になつたのは確かだつたと言う。総じてヘンな人物ながら、面倒見がいい姉御肌あねごはだなのでコアなファンがついている、このあたりが人物像に関する評だつた。

トレーニングの方では、フィジカル面の潜在能力は超一流で、きちんとしたトレーナーがつけばGIの複数のレースで勝利がもぎ取れること間違いなしとのことだつた。しかし三回に一回は行方不明になり、トレーニングメニューをきちんと受けさせるのは大変苦労するかもしれないという。

破天荒エピソードの最たるものでは、かつて二週間にも渡って授業や集団基礎トレーニングをまるごと休んで学園から姿を消していたことがあったという。方々探しても見つからず、誘拐の可能性ありとしてあわや公開捜査になりかけたタイミングで大型冷蔵トラックに海の幸山の幸を満載してトレセン学園に凱旋した。もちろん関係各所から盛大に怒られて外出禁止を言い渡されたという。なおその禁は即座に破られたとのこと。

「なんというか、まともに付き合うと死ぬんじゃないかこれ」

「だな。だからうっかり美貌に騙されてトレーナー契約を結ばないようにな」

「あー……それなんだが……」

「まさか引き受けてしまったのか!？」

「成り行きというか、惚れた弱みというか、まあ、やつちまつたな」

「死ぬなよ。今死なれたら包む香典が無いから」

「微妙に嫌な励まし方だな」

何はともあれ、健闘を祈る。そう締めくくって同期はトレーニングを担当している子のもとに向かった。

一息ついて、手元の資料を眺めた。同期の話を裏付けるように、座学やトレーニングの

成績、そして担当教官の所見しよげんが書かれていた。座学の成績は優秀、しかし出席率は低い。所見は「時刻厳守が要求されるレース関係の行動規律にあたり注意が必要」とのこと。確かに、レースに出ることになったら遅刻は大問題になる。最悪の場合は出走停止の処分が下ることもある。それ以前に、行方不明になりがちだといろいろと心配になる。彼女本人のことが心配なのは七割くらいで、残り三割は先ほど聞いたエピソードのように、彼女の行動に巻き込まれる人のことが心配だった。巻き込まれた人が無事でいられるかということ。

ページをめくると、体力テストの結果が書かれていた。トレーニングにおけるコース走破タイムとラップタイムはなかなかのものだった。このくらいの力があると、下手したらオープン戦まではトレーナー抜きでも余裕で連勝できるかもしれない。ただ、スタートのトレーニングにおける課題点として、ゲート入りや待機時の問題が指摘されていた。

さらにページを繰ろうとしたら、いきなり資料が誰かに抜き取られた。顔を上げて横を見ると、ゴールドシッポ本人がいた。

「よう」

「授業は——さつき終わったところか」

ゴールドシップは俺がさつきまで読んでいた資料をばらばらとめくり、特に何か反応を示すでもなくすぐ返してきた。

「アタシの情報は仕入れられたみたいだな。優秀、でも扱いにくくて仕方がない生徒だったろ？」

「書いてあることが全部本当なら、あらゆる意味で規格外に違いない。でもなんだ、同期の話や資料に書かれている感じよりも、俺が目にする君は落ち着いているというかなんというか」

「あー、それはな……」

ゴールドシップは困ったような表情で頭をかいて答えた。

「おっちゃんにはいずれおいおい話すつもりなんだけどさ、今言えるとしたら、ある種の二面性的なモロモロだな」

「二面性？」

「みんなからいろいろ聞かされてる話やこの資料に書いてある話、あの『ヘンな奴』もアタシなんだけどさ、今こうしておっちゃんとシリアス度ちよい増しつぽく話しているのも間違いないアタシ。別に二重人格ってわけじゃない。ただ、おっちゃんに今見せてる感じ

のやつは、できれば他の人には晒したくない姿というか、な」

「そうか」

このミステリアスな、あるいはアンニュイな感じの姿が自分相手だけだと聞くと、なんとなく優越感を覚えなくなかった。我ながら単純な頭をつくりをしている。

「というわけでさ、たまには……いや、しょつちゅう？ おつちゃんを連れ回したりするかもしんねーけどさ、よろしく頼むよ」

「ああ」

様々なエピソードを踏まえると、連れ回される先は世界規模のトンでもないところだと予想されたが、この際すべて引き受けよう。さつき同期相手に言った通り、惚れた弱みというやつだった。三十代にして独身の男、八年に渡り十代女子を指導してきて初めて、年下の少女に恋愛的な方向で心を動かされた。

翌日、トレーナーが集められて開かれた定例会議が終わって、会議室からトレーナー室に向かう途中で来年度の方針に思いを巡らせた。

今まで担当してきていた子たちがちょうど今年度末でみんな卒業するため、新年度の

チームは一から編成することになる。一人はゴールドシップで決まったため、チームを組むには最低あと四人を選んで担当することになる。実際は一人、二人少なくともチーム結成が認められるが、その場合は速やかにメンバーを増やすことが求められる。

トレセン学園では、トレーナーに対してトウインクル・シリーズへの出走を希望する生徒の数が圧倒的に多いため、募集したらすぐに志願者が集まるに違いなかった。もちろん、あまりにも人数が多いと指導しきれなくて、逆に彼女たちのレース人生を台無しにしてしまう可能性が高いため、ある程度はコース適性・距離適性で人数を絞らなければならぬ。ゴールドシップの存在により、他の子が集まってくれるか、逆に遠ざけられてしまうかは分からないが、人気のほどを見る限りは希望者ゼロにはなるまい。

トレーナー室に着き、椅子に座ろうとした瞬間、背後のドアが外れる勢いで開いた。「おっちゃん！ 新メンバーの一人目を早速連れてきたぜ！」

ゴールドシップの肩には見るからに怪しい大袋が抱えられていた。しかもその袋は激しく動いていて、中から声のような何かが聞こえてきている。申し開きのしようもなく、完全無欠の拉致だった。

「……ゴールドシップ、一緒に出頭しよう。今ならまだ執行猶予がつくかもしれない」

「いやおっちゃん、袋詰めした時点でもう罪を背負っちゃってんだ。地の果てまで一緒に逃げようぜ」

「むぐぐぐぐぐぐぐ!!」

変なコントを繰り返している場合ではなかった。ゴールドシップの手で袋詰めされた生徒を早く解放しなければ。ゴールドシップに袋を下ろさせて、口を開けると中から一人の子が転がり出てきた。

「……つぶはっ！ 何するんですのゴールドシップさん！」

「いやマックちゃんそろそろトレーナーを探したいって言ってたろ？ アタシのトレーナーがチームを組むって言ってたから連れてきたんだよ」

「でもいきなり袋詰めにすることはないでしょう！」

ゴールドシップとこの子は知り合いらしい。特に遠慮することなくワイワイやりあっていた。

「あー……、ゴールドシップが迷惑をかけたようですまなかつた」

「あ、いえ。トレーナーさんが謝ることではありませんわ。すべてはこの問題児が悪いのです」

「ぶー」

ふくれっ面になったゴールドシップは措くとして、ひとまずトレーナー室の片隅にある応接スペースに案内し、その子の名前を訊くことにした。お茶を人数分用意して座ると、ゴールドシップは自分の横にびったりくつつくように座った。

「申し遅れました。私、メジロマックイーンと申します」
人生終了。

ウマ娘界、とりわけトウインクル・シリーズにおいて大変な名家であるところのお嬢様でした。どうやら本気で人生が終わってしまったらしい。ゴールドシップの助命嘆願じよめいたんがんをしてハラキリをしなければならぬかもしれないかもしれん。

「マックちゃんはアタシの盟友、パートナー、そしてじじまごの関係にだってなってるぜ！」

「もうまた変なことを！ 盟友にもパートナーにもなった覚えはありませんし、さらに性別は女性ですし、そもそも私の方が年下です！」

年下の子を捕まえておじいちゃん呼ばわりするとは奇怪が過ぎる。これがさつき言っていた、みんなが普段見ている『ヘンな奴』としてのゴールドシップかもしれない。

「ところで、ゴールドシップとメジロマックイーンさんはどういったお知り合いで？」

「この世界を半分に分け合う血の盟約を交わした心の友だぜ！」

「一方的にからまれている関係です」

「……」

全くかみ合っていない。今のゴールドシップには関係性を正確に語ってもらえそうになるので、メジロマックイーンさんに話してもらおうことにした。明らかに無視する形となったことに気付いたゴールドシップが後ろでブーイングしていたが気にしないことにする。

「私が中等部に入学したその日に、クラスメイトを介して急に呼び出されたのが始まりでした。当時はとても驚きましたわ。クラスメイトの方が『なんかとつても綺麗な先輩が』『メジロマックイーンという子に三女神の像のところに来るよう伝えてくれ』つて来たんだけど……」と目を輝かせながら仰られまして、いったい誰なのかと思いつつ行ったのが運の尽きでした」

「ひでえなマックイーン、生き別れた孫との運命の出会いだろ〜」

「私はあるあなたのような孫どころか子もおりません。許婚いいなうけもまだ決まっておりますん」

「本当のことなんだけどな〜……」

ゴールドシップが妙にメジロマックイーンさんのことをおじいさんと呼ぼうとするのは少し謎だったけど、そこに突っ込むと話が長くなりそうだったので後回しにしよう。しかし、許婚という単語が出てくるあたり、やはり名家に連なる者という感がある。

「コホン。ゴールドシップさんのファーストコンタクトが何だったと思います？ 『メジロマックイーン、キミに世界の半分をやるわ』でしたわ！ 何を言っているのか全く分かりませんでした！ すぐ帰ろうかと思いましたが！」

「大変だったね……」

「でもマックちゃんさ、アタシが『世界のスイーツの半分もキミのものだ』って付け加えた時にめっちゃ食い気味に『本当ですか!?!』って返事したじゃねーかよー」

「そ、それは……」

メジロマックイーンさんが目を泳がせる。この話が本当なら、この生真面目そうな子も意外と変わり者……いや、生徒を色眼鏡で見てはいけないな。

「それでさ、マックイーンをスイーツバイキングに連れて行って一杯食べさせて、アタシの一人の子分にしたらってわけ」

「自分になった覚えはありませんが……」

とりあえず、メジロマックイーンさんは見事ゴールドシップに一本釣りされるような形で取り込まれ(？)、ゴールドシップの方が一方的につきまとうような形で仲良くしてき
たらしい。

「それで今日に至るのですが、私が『そろそろ模擬レースと選抜レースを通して実力を確かめて、トレーナーを見つけないければ』と独り言をつぶやいた時に、ゴールドシップさんが陰から不意に姿を現しました。……後はご覧の通りですわ」

「マックちゃんの決意をそのままパッキングして連れてきたんだ。褒めてくれていいぞ」
経緯をだいたい理解できた。というわけで、おもむろに立ち上がってソファの横に移動した。

「ゴールドシップ、ちよつとこつちへ」

「ん？ どうした？」

「正座」

「なんだよー、マックイーンに謝れっつてか？」

ソファから立ち上がって俺の横に渋々座ったゴールドシップとともに平伏した。正確にはむくれたゴールドシップの頭を左手で押し下げつつ頭を低くした。日本古来の伝統芸

能・土下座。この一択だった

「大変申し訳ございませんでした」

ゴールドシップの奇行と俺との間には直接関係はないとはいえ、後から監督責任を問われて社会的に抹殺されるのは御免被^{ごめんこうむ}る。

「そんな、トレーナーさんまで！ 頭を上げてくださいますし！」

うろたえるメジロマックイーンさんの前でたっぷり頭を下げて詫^{ちや}びを入れ、ソファに戻った。ゴールドシップが不服そうに睨^{にら}んできたけど無視した。

「それで、メジロマックイーンさんのトレーナーの件なんだけど」

「マックイーンと呼び捨てにしてくださいさつて結構ですわ、トレーナーさん。私は若輩者^{じやくはいもの}、トレーナーさんに教えを請う立場です。あと、長いと呼びにくいでしょうし……」

「マックちゃんでもいいぞー」

「あなたは黙っていてください！」

一息入れたマックイーンさん……マックイーンは、自分の目をしっかりと見て話し始めた。

「ゴールドシップさんが語った通り、私がトレーナーとして日々のトレーニング全般を見てくださる人を探し始めたのは事実です。集団での基礎トレーニングを経て、いよいよ選抜レースに出るべき時が来ました。メジロの一族の悲願、それだけでなく、私自身の願いとして、ステイヤーとして私の名を歴史に刻みたい。春の天皇賞の盾を我が手にしたいと願っております」

「ステイヤーとして活躍したい、と」

その時のマックイーンの目には、確かな闘志が感じられた。

「……そうだね。ひとまず、一般的なトレーナーとのマッチングの流れは知っているね？」

「はい。選抜レースなどで走って、その際のスコアなどを見て、トレーナーの側からスカウトするのが一般的であると聞いております」

「その通り。それ以外にも、トレーニングの場面で見掛けたりとか、基礎トレーニングの成績評定を見たりしてスカウトする子を決めたりする。例外的なパターンだと、ごくまれにレースと関係のないところで意気投合して始まったアグネスデジタルみたいな例もあつたりするけど」

「アグネスデジタルさんは……ええ、確かに……」

「つまり、第一には『見てもらう』ことになるかな。選抜レースだと長距離相当のものは設定されていないから、中距離のうち長めのところに登録して走ることになる」

「そのように計画しております」

「おそらく、多くのトレーナーが声をかけてくると思うから、その時に長距離志望の旨を伝えてマツチングして、一番いいと感じたトレーナーと契約するという流れだね」

「なるほど。ありがとうございます」

「自分もチームを組むにあたって、いろいろな子を探したり、希望して来てくれる子とマツチングをしたりといろいろするから、選抜レースは全部見に行くことにしているよ」

「ぜひ、私の走りも見てくださいね」

お茶をひとすりした時、ずつと黙っていたゴールドシップが口を開いた。

「マックイーンさ、早速うちに加盟しねーか？ 悪いようにはしないぜ」

「なんでゴールドシップさんが取り仕切ろうとしているんですの？」

「マックちゃんとならアタシも一緒に楽しくやれそうな気がするんだよな」

「そうですね……ゴールドシップさんのことは抜きにして、私としても早めにトレ

ナーが決まるとありがたいところですが、きちんと見ていただいて、すり合わせをしないと、お互い不幸になりますもの」

「そうだな。自分としても、ある程度の提案をするためには、基礎トレーニングでの評価を参考にしたい」

「でもよー、マックちゃん取られたら世界の損失だぜ。せめて背中に『チームゴルゴル優先交渉権獲得済』みたいな貼り紙しようぜー」

「勝手にチーム名を決めるな。でもゴールドシップがそこまで言うとなんか少々気になるな。強引な手段で連れてきてしまったとはいえ、これも何かの縁。自分と、うちのチームのことを記憶の片隅に置いておいてくれると嬉しい」

「ありがとうございます」

マックイーンを送り出し、今度はゴールドシップと向かい合った。さっきまでのおちゃらけぶりは鳴りを潜め、俺の前だけで見せるという真面目な姿に戻っていた。

「ゴールドシップ。マックイーンをかなり引き入れたがっていたが、何かあるのか」

「ひとつは潜在的能力、いや、アタシはこの目で見てきたから実力と言ってもいいか。そ

れがある。そしてその力はおつちゃんのもとでこそ最大に伸びる」

「ずいぶん俺のことを買いかぶってくれてるな」

「事実だよ」

まるで実際に見てきたかのように断言した。

「あとは、マックイーンが今後の鍵になるんだ。だから、なんとしても獲得してくれ。頼む」

そこまで真剣な口調で力を込めて言われると、無碍むげに断るわけにもいかない。自分としても結構気になってきたので、選抜レースでは真っ先に声を掛けに行こうと決意した。

3 三人目、不動点のブロンズコレクター

今期初の選抜レース開催を迎え、開催コースには出走する選手達のほか、見学する生徒やトレーナーがたくさん集い、大変賑やかになっていた。自分も資料たずさを携えて、スタンド

の前の方に陣取った。ゴールドシップと直前に開いた最終打ち合わせでは、本日のスカウト任務は自分だけが担当し、ゴールドシップは遊撃班的にサポートすることだったか……。

「何やってんだあいつ？」

ゴールドシップは実況解説席の横に焼きそばの屋台を開き、調理しつつマイクで選抜レースの案内をしていた。選抜レースは実況とアナウンサーを専門の職員が担当するのが恒例だったはずだが、両者揃ってどこに行っただろう。まさかゴールドシップが袋詰めにしてどこぞに放置していないか？ などと心配しているうちに、ゴールドシップのシャウトが耳に突き刺さった。

『選抜レース第一レースの開始だオラアッ！ 観客とトレーナーはトレセン名物ゴルシちゃん焼きそばを持ったか？ 選手は走り終わってから食べに来い！ 実況は毎度おなじみエンペラー・G・S!! 解説はこの人!』

『学園食堂調理部主菜係チーフです。よろしくー。……でもいいのゴルシちゃん？ 私みたいに裏方のヒトのおばちゃんより、強いウマ娘さんの方が適任じゃないのかい？』

『おばちゃんは普段のみんなの様子を一番よく見てくれてんだ、ぜひ走ってる子らのエビ

ソードを話してくれ!』

『そうねー、それなら少しお手伝いしようかねえ』

『よし決まり! では第一レースは芝2000m! 第一組の選手十六人、ゲートへGO!』

ゴールドシップの合図で十六人の選手たちがゲートへ向かった。遠目に見ても大部分がガチガチに緊張しているのがよくわかる。競走人生の第一歩とも言えるべき舞台ゆえ、当然のことだった。このレースで注目するようゴールドシップが印をつけていた子は一人。

『——おおおおつつ三番ッ! 商店街がバックについている、トレセンエリアのトップアイドル、ナイスネイチャアアアアアッ!』

まさにその子は、ゴールドシップのシャウトの直後、顔を真っ赤にしてうずくまってしまう。これから走る選手にあまりプレッシャーをかけないでほしい。

『ネイちゃんは学園食堂の救世主よ。彼女のおかげで仕入れ値をかなり安くしてもらってるの』

『トレセン食堂の明日は彼女にかかっている!』

頭が痛くなってきた。視線を上げてあたりを見渡すと他のトレーナー達と目が合い、皆

からとても渋い顔をされた。ゴールドシップのトレーナーになった話は光速で学園内を駆け巡り、全員の知るところとなつている。周りからの視線が痛い。早くなんとかしろと圧力がかけられている。だが、ゴールドシップとの約束で、彼女が何をしようとも止めずに見守っていてくれと頼まれていた。生徒会が止めに来るまではここで待つ決意だった。

……しかし、結局あの調子で選手紹介を十六人分やつたため、本番レースのパドック短評並みに時間を食った。このままでは最終レースが夜になる。やはり止めるべきか。ゴールドシップ宛てに『巻いて行け』とメッセージを打った。

第一レースのゲートが開いた。選手達が一斉に飛び出す。初めての公式なレースとあつて、タイミングをうまく合わせられたのは数人ほどで、残る選手は出遅れとなつた。

『さあスタートはバラバラになつたけど緊張してたらよくあること、慣れりやよし！

さあ先頭の子はもう第一コーナー半ば、後ろが大きく離されているがペース配分は大丈夫か！』

『先頭の子はちよつと少食気味な感じなのよね。少ない量でもスタミナがつくよう工夫したものを提供するべく新規メニューを開発してるわ』

『ありがてえ！ 選手は団子状態ながら少しずつバラけ始めた！ 商店街アイドルは後ろの方から全体を見渡している!!』

ゴールドシップの実況のためか、例年の数割増しで声援が聞かれ、シンガリ入線の子がヘトヘトになりながらゴールした時は盛大な拍手が起きた。

そして、注目していたナイスネイチャさんは三着だった。三着とはいえタイムは上々で、その名の通り、素質は十分ある。彼女が帰る前に呼び止めに行った。

「あの」

「どうしましたゴールドシップのトレーナーさん？ 彼女ならエアグルーヴに追われて向こうに走って行っちゃいましたよ？」

「生徒会に捕まったら俺も始末書だな……」

一日一枚、三日で九枚、日数の二乗で増えて行くような気がする。

「アハハ……じゃ、私はこれで」

「ちよつと待った。ナイスネイチャさん、君に用がある」

「ネイチャで良いですよ。商店街との価格交渉ならお任せくださいね。それともトレー

ナー契約？ まさかね、アハハハハ！」

「そのまさかだ」

「ちよつとネイチャさん調子に乗りすぎまし……マジ？」

「大真面目にマジ」

それを告げた瞬間のナイスネイチャの表情は困惑か、あるいは恐怖か。

「私を取つてもいいことナイデスヨ？」

「ある」

「うっ……」

彼女はワナワナ震え、目がぐるぐるしたような感じになり、次の瞬間猛スピードで逃げ去ってしまった。

「うにやあああああああああーっ！」

もともと一回でうまく行くとは思っていなかったので、気を取り直して明日以降に再度スカウトに行こう。では次の子をチェック——

『白江トレナー。至急理事長室までお越しください』

たづなさんから校内放送で呼び出された。唐突に今季が終了してしまった。そのまま出

頭するか、ゴールドシップの身柄を土産に降伏するかを考えているうちに、目を回したゴールドシップをぐるぐる巻きに縛って引きずってきたエアグルーヴ陛下がお越しになった。万事休す。

「失礼。白江トレーナー、申し訳ありませんが御同行願えないでしょうか？」

「……わかった。苦勞をかけてすまない」

ゴールドシップとともに連行された先で、たづなさんからたつぷり説教された。顔がにこやかなのに背後に夜叉やしやの面が浮かんでいるのがありありと感じられた。気を抜くと命を狩られてしまう。いつも大変快活で俺や他のトレーナーを励ましてくれる秋川やよい理事長も珍しく苦笑いしていて、お土産として「自重じちゆうッ！」と大書された紙とグッズ一式が渡された。いわく、日々の暮らして「自重」の二文字を魂に刻み込み、もって学園での活動まゐに邁進まいしんしてほしい、と。

珍しくしよげてヨレヨレなゴールドシップを引っ張ってトレーナー室に戻ると、部屋の前で二人のウマ娘が待っていた。

「お二人ともこつてり絞られたようですね。今しばらく反省しててください。まった

くもう」

せつかく成果をお見せしようとしたのに、いらつしやらないのでは甲斐がありませんわ、とマックイーンが呆れていた。そしてその横、半分陰に隠れるようにしてネイチャさんがいた。

「……え、えーつと、こんにちはー……、なんてね、アハハハハ……」

その姿を見るや否や、ゴールドシップの背筋がピンと伸び、一気に表向きのはっちゃけテンションに復帰して二人のもとに駆け寄った。

「ようマックイーンとナイスなねーちゃん！ 早速契約書にサインしてくれ！」

「なんでゴールドシップさんがまた仕切っているんです？」

ゴールドシップの声掛けに、マックイーンはやや困惑顔で応じた。それもそのはず、ただのチームメンバーに過ぎないはずの子が、まるでボスであるかのように勧誘を取り仕切っているのはかなり奇妙に見えるに違いない。

一方、ネイチャさんはとても引きつった顔で応えた。ネイチャさんの顔はあれだ、漫画だったら確実にこめかみの所に怒りマークが三つくらい並んでいる感じになりそうだった。

「ナイス『ネイチャ』だっ！ 次そう呼んだらゴルシの埋蔵金をみんなにバラすから」
ネイチャさんが言い放つや否やゴールドシップがいきなり真顔になって、超真剣な口調で語りかけ始めた。

「ナイスネイチャ君、冷静になろう。我々は話し合いによって相互理解と同盟締結ができると固く信じている」

ゴールドシップの埋蔵金ってなんだろうな。まだゴールドシップのことをほとんど知らないけど、意外とお嬢様なのかもしれないし、隠し財産のひとつやふたつはあるのかもしれない。

「はいはい。スイーツ食べ放題で手を打ちますよ」

「あざす！ ふー助かった……アレがばれると世界がひっくり返るから……」

ゴールドシップとネイチャさんとの間で和解が成立したところで話を戻した。

「ところで、二人はどのような用で？」

「それはもちろん、トレーナー契約のお願いとチームへの加盟申請です」

「はい、その、アタシも……マックイーンと比べたら全然だし足手まといかもしれないけ

ど、でもせつかく声をかけてもらったのに逃げたらネイチャさん一生の恥といえますか……」

「ありがとう。ひとまず詳しい話をしよう。どうぞ中へ」

二人をトレーナー室に招き入れ、応接スペースに案内した。資料を書庫と引き出しから取り出している間にゴールドシップが飲み物を出していたが、それを見たマックイーンとネイチャさんの顔がひきつっているのに気付いた。

ゴールドシップがテーブルに用意した四つのグラスには、なにやらドロリとしたものを感ずる緑色のかたまりのような液体のような何かが入っていた。

「……この青汁みたいな飲み物は何だ？」

「これか？ 学園食堂で出る飲み物の中で栄養価ナンバーワンの超健康青汁だけ？」

「ちなみに人気ランキングは？」

「ぶつちぎりの最下位！ 体力がもりもり回復する代わりに、やる気が根こそぎ行方不明になる困りものだ！ これを試したトレーナー達とウマ娘達が揃いも揃って体力はあるのに心が後ろ向きになって引きこもってしまった。これ飲んでるのは夏と冬のコミなんとかの締め切りに追われている時のデジたん先生とどぼ先生くらいだな」

「誰？」

デジたん先生とどぼ先生……そんな名前ですと呼ばれてる子はいったい誰？ となりつつ、お客さんがドン引きするような飲み物を出してチーム加盟の話が流れてしまっただけではないので、謎の青汁を入れたグラスは冷蔵庫にしまい込み、代わりにコーヒーとチョコレートを用意した。

「改めまして、つい三十分前にトレセン学園で最も当局から睨まれる問題組織と化したチームへようこそ。今ならまだ他のまともなチームへ行けるよ」

「待ってくれよおっちゃん、せっかく来てくれたカモ……ゲフンゲフン、優秀な選手の卵をみすみす逃すのはもったいないぜ」

「ゴールドシップさん、あなた今『カモ』っておっしゃいましたよね？」

「いや『神』って言ったぞ？」

「……追及したら日が暮れそうですから先に進めます。今日の騒ぎを考慮に入れた上で、それでもなお私達はトレーナーさんとともに活動していきたいと思っています」

「です。各チームとトレーナーの年次レポートをいろいろ読んで、トレーナーさん

——白江トレーナーが一番合っているな、って思っていました。さつきはトレーナーさんから声をかけられてテンパっちゃって逃げちゃいましたケド……」

初手からグダグダなこのチームに来てくれると言ってくれるのは大変ありがたい。二人の希望するレースの方向性を改めて聞き、契約の手続きをした。

「じゃあ週末に親睦会しんぼくかいしようぜ！ ネイチャとの約束通りスイーツ食べ放題で！」

「いいんですの!？」

「あ、マックイーンは控えめにしろよ？ 前に行った時、あそこの店長からこのままだと店がつぶれるって泣きつかれたんだからな」

「……反省しております」

マックイーンが目に見えて元気をなくし、耳がペタンと寝てしまった。

「アハハ……」

苦笑いするネイチャさん。今後そのお店に行った時は高いものを買うことにしようと思

「ところで、そこにある『自重』と書かれた物の山は何ですか？ アタシのレースの時の騒ぎのせいですか？」

「ああ、たづなさんと理事長からお土産としてもらってしまっただけ。この部屋のインテリア代わりにもでしょうかと」

「ソウナンデスネー、じゃあ仮のチーム名にでもしときます？ チーム『自重』、なんつって」

「……一応考えておくよ」

無事勧誘に成功したところで、曲がりなりにも本日の目標は達成できた。

「おっちゃんお疲れ！ じゃあまた明日——」

「待てゴールドシップ。仕事があとひとつ残ってるぞ」

「えー……おっちゃん代筆してくんね？」

「たづなさんと生徒会からのお達しでな、どちらかが代筆したら処分が二段階重くなるぞうだ」

「やだなーもー……」

その後日が暮れるまで、理事長に提出する自分の始末書と、生徒会に提出するゴールドシップの反省文を書く時間となった。途中で眠くなったため、気合注入のために先ほど冷蔵庫にしまい込んだ青汁を飲んだら、疲れが取れたのに急に空しさが襲ってきた。始末書を書いている俺の存在とは何だろう、故郷に戻って別の仕事をすべきか……

「おっちゃん死ぬな！ 残りのロイヤルビタージュースはアタシが処理するから！」

この青汁、ロイヤルビタージュースって名前がついてたんだな。どこがロイヤルかは分からなかったけど、ビターなのは確かだった。そして、残る三つのグラスに入ってたロイヤルビタージュースを一気に飲み干したゴールドシップは、あつという間に安心してソファに倒れ込んでしまった。

「なあ、一緒に出家してこの世の真理を悟りに行かないか……？」

「まず始末書と反省文を片付けてからな……」

どうにか書き上げて提出し、俺もゴールドシップもヨロヨロしながらそれぞれ家路いえじについていた。結局調子が戻ったのは翌朝だった。

4 四人目、遠い昔の恩人、あるいは恋人

反省大会から数日、もうすっかり春の陽気になり、汗ばむくらいの気温の中、俺とゴールドシップは屋外で活動していた。

「暖かくなったなあ」

「だなー。ところでおっちゃんは花粉症とか無いのか？」

「おう、幸いにして何も無い」

この春は花粉症持ちにとつては辛い季節であると聞く。

「ゴールドシップは？ ウマ娘の花粉症は聞いたことはないけど」

「アタシ達にはそういうのは無いみたいだな」

「へえ」

始末書と反省文を提出後、ゴールドシップと自分にそれぞれ学園内奉仕活動十時間の処

分が下された。一日二時間とするとちょうど平日一週間分だった。

チームに加盟してくれたメジロマックインとナイスネイチャには初っ端から申し訳ないが、トレーニングメニューを渡して自主トレをしてもらっている。その時に例によって「ネイチャさん」呼びをしたら、「なんであたしだけさん付けなんですかね、呼び捨てにしてくれて大丈夫ですよ」と言われたので呼び方を変えた。

今日の活動は学園内にあるにんじん畑の手入れだった。今の時期はちょうど春にんじんが育ちつつある。この時期は生育を良くするために草取りが欠かせない。広大な菜園の世話をする職員さんいわく、葉を虫に食べられてしまうこともあるので、日々注意しつつ除草と防虫の処置をしているという。

今日は自分とゴールドシップを含め、全員で殺虫剤を噴霧して回っている。ゴールドシップは慣れた手つきで噴霧器を操っていた。菜園管理のアルバイトをしていた時によく使っていたというけど、いつ働いていたのかは教えてくれなかった。自分はせいぜい実家の庭木の消毒で扱ったくらいなので少し手こずった。

「よし、作業終わり！ ありがとうなゴルシちゃんとトレーナーさん！」

「おう！ また呼んでくれ！ アタシが全部片付けてやるよ！」

「今度は奉仕活動の処分以外で来ような……」

今日の奉仕活動の時間はあと一時間ある。他に何かやることは無いか尋ねたところ、

「そうだな、その詰所で休憩なり考え事なりトレーニング計画なりしたらどうだい？
学園への報告書には『二時間菜園管理作業に従事した』って書いてはんこ捺おしとくから」

「ありがとうございます」

お言葉に甘えて、詰所にお邪魔することにした。休憩がてら職員のみなさんとお喋りをした。ゴールドシップの奇行は職員さんにも知れ渡っていたらしく、最初は少し構えていたらしい。しかし的確かつ素早い仕事で大いに助かったので、暇なときには手伝いに来てほしいとの言葉を頂いた。

時間が明け、トレーニング室に立ち寄って自主トレ中だった二人を呼び、トレーナー室へ帰還した。せっかく全員揃っているので作戦会議を開く。チームとして認められるためには、あと一人か二人は加盟してもらおう必要がある。

「次は彼女を勧誘するぞオッラーン！」

ゴールドシップが力をこめて一人のウマ娘の写真をホワイトボードに張り出した。その

写真の主はメジロドーベル——トウインクル・シリーズでの活躍を志望する生徒が所属する競走課程ではなく、トレーナー課程に所属する生徒である。当然、彼女の身内であるマックイーンは困惑した表情を浮かべて口を開いた。

「……あの、ドーベルはトレーナー課程に在籍しているからチームに加盟できないのでは？ 幼い頃から聞いていましたし、ちょうど先月の授業で学園のレース活動関係の制度を学んだ際にもそのような記述がありました」

「アタシも知ってるぞ！ 彼女はレース出走メンバーじゃなくて別枠だ！」

「そんな枠ありました？」

ゴールドシップに依頼されて調べた事項を説明した。マックイーンの言う通り、メジロドーベルはチームの出走メンバーとしては加盟できない。しかも、トレーナー研修生としてチームに配属できる学年でもない。しかし、チーム編成規則にほとんどの人が忘れ去り、現行の課程編成上は利用が想定されていない制度があることを発掘した。

「『トレーナー課程の中等部生徒をトレーナー見習いとしてチームに加盟させて教育を実施し、実習科目の単位とすることができると……？ こんな規則よく見つけましたね』」

ネイチャが目を丸くして反応した。自分も調べるまでは全く知らなかった。今のトレセ

ン学園の課程では、中等部でのトレーナー見習い実習は実質的にはチーム活動の实地見学をするだけで、各チームへの加盟はしないことになっていた。そのような中で、メジロドーベルをトレーナー見習いの枠でこのチームに在籍させることをゴールドシップから提案された。もちろん、他の生徒の活動から一人だけ引き離して活動させるわけにもいかないので、実際の活動は正課の実習が設定されている日以外とするつもりである。もし認められたら、チーム活動開始に一步近づくとともに、ゴールドシップの目指すものが実現に近づく。

「とういうわけでだ、マックイーン、ベルベルミーナを拉致してくるぞ。アタシと一緒に来な」

「ダメです」

「なんで？」

「当たり前のことをどうして断るんだという顔をしないでくださいな！ あの子は繊細なんです。そんな真似をしたら絶対に来てくれなくなります！」

「そもそも人を拉致つてくるのが犯罪なんですけどね……ところでトレーナーさんはメジロドーベルさんをどう勧誘するつもりなんです？ みんなが知らないような規則を使つて

口説いたとしても、たぶんそうそう来てくれる気がしないんですけど」

「ああ、ネイチヤの言う通りだ。でもゴールドシップと立てた秘策がある」

「……なんかロクでもない策な気がしますけど」

まあ、少々奇妙な勧誘になるけど、捕まるような方策ではない。

「ゴールドシップ、トレーナー課程の授業が終わったら行くぞ。その袋一式は絶対に置いていけ」

「ぶー」

授業終了を見計らって、トレーナー課程の教室へ向かった。自分とゴールドシップ、そしてお目付役としてマックイーン、仲裁役としてネイチヤが同行した。結局今のチーム全員じゃないかというツツコミは受け付けない。幸い、メジロドーベルさんはまだ教室のみにいた。

先に教室に入ったゴールドシップが俺達を置いてスタスタとメジロドーベルさんのもとに歩み寄った。

「メジロドーベルさんですね？　ワタクシ、トレセン警察の金田一船造と申します。署ま

「で同行願います」

「誰!？」

ゴールドシップが余計な芝居を始めたため、マックイーンがゴールドシップのもとに瞬間移動し、あつという間にシバいてその場に沈めた。

「余計なことをしないでくださいまし!」

「あ、マックイーン。これは何事なの……?」

すっかり怯えてしまったメジロドーベルが唯一知っているであろう身内に声を掛けた。

「え、ええ……ちよつと貴方にお話がありました」

マックイーンからバトンを受け取る形で話を始めた。

「こんにちは。このチームのトレーナーを勤めている白江と言います。ちよつとしたお誘いの話なんです、お時間はありますか?」

「え、ええ……三十分くらいなら」

一応話は聞いてもらえるらしいので、揃って食堂カフェテリアの方に移動した。

「改めまして、メジロドーベルさん。突然かつ前例のないお願いで申し訳ありませんが、

私のチームに参加していただけないかと思ひ、訪問いたしました。先ほどのチームメンバーの失礼な振る舞い、お詫びいたします」

「……えつと、私はトレーナー課程なので、トウインクル・シリーズのチームメンバーにないのはご存知のはずだと思うのですが……」

「はい。実は今回は『トレーナー見習い』の名目で、実習科目の一環として参加していただきたいと考えております。単位認定もされます。まあ、今の課程編成では単位が追加されても有用というわけではありませんが……」

「そういう制度は初めて聞いたんですが……」

「古くから授業制度のひとつとしては存在していましたが、二十年近く前の課程再編の時に授業形態が変わって、意味がなく、使われない制度として忘れ去られていました」

「どうして中等部の私を？ 研修だったら高等部の人の方がいいと思います」

「ここまでは想定通りの流れだった。納得してもらうための説明をもう少し付け加えます。確かに近年事例がない異例のことです。しかし、それをあえて実施したいと思ひました。ひとつは、メジロドーベルさんの観察眼がチームの発展に大変有効であると判断したことにあります。いわゆる『青田買い』というやつです」

「そんなに買い被られても困ります……」

「ふたつめとして、私のチームはまだ正式なチームとして活動するための人数を確保できていません。諸事情があつて、初期のチームメンバーを限定することになりました、その際にこちらのメジロマックイーンさんから候補として推挙すいきよいただきました」

「えっ、わたむぐっ」

突然引き合いに出して申し訳ない。ゴールドシップとの打ち合わせで決めていただけでマックイーンには何も話をしていなかったもので、間違いなくマックイーンから物言いがつくであろうその時には、ゴールドシップにその口を押さえてもらうようにしていた。

「は、はあ……」

少し疑念が晴れたようだけれども、やはりまだ納得にはほど遠いようだった。そろそろゴールドシップに飛び道具を出してもらうか。

「いきなりの話で困惑されるのは当然のことです。できれば好い返事を期待したいところですが、もちろん断つていただいても構いません。……ご参考までに、私のチームならではの特典を示したいと思います。ゴールドシップ」

「おう。ベルガモットちゃんに良い作画環境を提供したいんだ」

「私はメジロドーベルです……つて、え？ 作画!? いえなんでそれを!」

「アタシさ、ベルちゃんの大ファンなんだ。いや、こう呼んだ方がいいかな」

ゴールドシップがドーベルさんの耳元で何事かを囁くと、突然ドーベルさんが顔を真っ赤にしてその場から逃げ出そうとした。

「ネイちゃん、捕まえろ!」

「えっ!」

ゴールドシップの突然の無茶振りにも即座に反応し、ネイチャがドーベルさんを抱きとめるようにして捕まえた。それでもなお逃げようともがいているようだったけど、意外とネイチャの力が強かったのか、諦めてその場へたり込んでしまった。顔は赤く、耳は垂れ、目には涙が浮かんでいた。

「……もう生きてけない……いつそ殺して……」

「ゴールドシップさん、ドーベルに一体何を言っただんですの? 返答如何で今年丸ごと貴方を休養に追い込みます。お覚悟を」

「ママママックちゃん待ってくれ! これには訳が」

「三分間待ちましょう」

ゴールドシップが自分を手招きした。ひそひそ声で臨時の作戦会議を行う。

「なあ、誤解を解くためとはいえやつぱりいきなり秘密をバラすわけにはいかないよな」

「そりやもちろん。むしろ身内だからこそ隠したいことだつてあるだろうし」

「わかった。アタシがなんとかするしかないな」

会議終了。ゴールドシップはマックイーンと向かい合った。

「答えを聞きましょう」

「バー」

「フツ」

ゴールドシップが何を言おうとしたか最初の発音で察したが、それはマックイーンも同じだったらしい。身体能力全般でウマ娘に人間がかなうはずがなく、圧倒的な瞬発力でゴールドシップのもとに移動していた。彼女がマックイーンの手で今季絶望の刑に処される前に止めなければと声を上げた。

「おい待ってくれ！」

「待ちません。トレーナーさんには申し訳ありませんが、家族を泣かせた者は成敗しなければなりません」

万事休す。これはどうしようもないとお手上げになった時に、ドーベルさんの方から声が上がった。

「待つて……話す、話すから……」

みんなで席に戻って少し落ち着いた後、ドーベルさんが涙がこぼれかけていたのを拭^{ぬぐ}つて話し始めた。

「……ずっと秘密にしてたんだけど、私、イラストを描いたり漫画を描いたりするのが趣味なんです」

「あら、そうでしたの。でもドーベルならとても似合ってますわね」

「最近だとインターネットでイラストを公開したり、知り合いのサークルの依頼を受けて寄稿したりもしてます。イベントは……まだ申し込める年齢じゃないんですけど」

「あ、聞いたことあるなく、そういうイベントがいくつもあつて。ネイチャさん絵も文もあまり書けないから、いろいろ作れる人はすごいと思う」

「ありがとうございます」

ドーベルさんの話にマックイーンとネイチャがとても感心していたところにかさず

ゴールドシップが話を差し込んだ。

「前途有望なドーベル大先生の悩み、それは作画の時間が取りづらいことにあつた！」

作画？ という感じでマックイーンとネイチャが揃って首をかしげた。単語の語感的に絵を実際に描いていく工程のことだと思うが、結構ハードなトレセン学園の学業と、時間を大きく取る必要があるタイプの趣味活動との両立は難しいに違いない。

「……はい。寮ですと平日は夜遅くまで作業できませんし、ちよつと内容的にできれば独りで描きたいものなので、作業場所選びに苦労しているのは本当です」

「そこで、大ファンのアタシは考えた！ ベル大先生の力をチームに取り入れつつ、敬愛する先生がのびのびと趣味活動に打ち込める環境を作りたいと！」

「はい。そこで、私のトレーナー室兼チームミーティングルームの一角に、自由に使える作業空間を用意したいと考えています」

ただの大ファンが活動スペースを提供するというのはかなり奇特な話で、初対面でこのような話を聞かされたら百パーセント詐欺だと思いうに違いなかつた。正直なところかなりの賭けではあつたが、ゴールドシップがこの提案とセットならドーベルをチームに迎えることができる、いや、迎え入れてみせると大変意気込んでいたので乗る覚悟を決めた。

たづなさんと学園事務部に話を通すのもかなり大変だろうが、それは俺の果たすべき役目だ。

「なんで私のためにそこまでしてくれるんですか？　まだ何もなかったただの生徒に過ぎないのに……」

「貴方が我がチームのために必要だと確信しているからです」

俺の言葉を引き継ぐように、ゴールドシップが続けた。

「アタシさ、去年あたりはいろいろなあつてさ、結構荒れてたんだ。授業も何も出ねえで、学園をゾンビみたいにうろついてて、もうすぐクビになるところだったんだ。そんな時にたまたまデジタルが落とした本を拾って読んで、その本の一章分にとっても心惹かれた。その章の作者がどぼめじろう先生だった」

「ひよつとして、あの本……？」

「デジタルに土下座してどぼめじろう先生の作品が入った他の本を貸してもらって、その時にポロつとどぼめじろう先生が今度トレセン学園の中等部に入学するって話してくれた。……デジタルのことを責めないでやってくれ。その後『うっかり現世の神の正体をバラすなどオタクにあるまじき所業！　この塵芥ちりあくたに等しき身といえども命を捨ててせめて

もの償いつぐなを……』とかとんでもないことを言い出すくらいには責任を感じてたから」

「え、ええ……」

ゴールドシップとメジロドーベルさんの謎の接点がこのようなどころにあつたとは。今までとにかく勧誘したいとの一点張りであつたので、その背景となる話を聞けたのは今日この時が初めてだつた。

「中等部一年だとまだよほどのことが無い限りチームには引き込めないから、この一年間ずっと待つてた。やさぐれていた一年前のアタシを救ってくれたベルちゃんに、せめても
の恩返しをしたい」

「そう、ですか」

ドーベルさんは逡巡しゆんじゆんする様子を見せ、それからしばらく沈黙していた。結論を急がせるのも良くないので、今日は帰ろうとしたところ引き留められ、力のこもった目で自分の方を見つめてきた。

「ぜひ、その話をお受けしたいと思います。必要としてくれるのは嬉しいですし……あと、ファンの方から応援してもらつたのも嬉しかった、から」

「ホントにいいのか……?」

放心した様子で問うゴールドシップに、メジロドーベルさんがしつかりと頷うなづいて返した。

「ありがとう。これからよろしく」

「歓迎しますわ、ドーベル。一緒に活動していきましょう」

「よろしくねドーベルさん！ いや、無事勧誘できて何よりですな」

「いよつしやあ！ 早速手続きしようぜトレーナー！」

ドーベルさんを含む全員でトレーナー室に戻り、書類の作成をした。また明日集まってもらうことにして、本日は解散とした。

みんなが帰った後、ゴールドシップと二人きりになったトレーナー室で話をした。

「ありがとな。もしベルちゃんちゃんの勧誘に失敗していたら、この世界では完全に行き詰まっ
てデッドエンドになっただけだ」

「無事成功して良かった。……ところで、そろそろ君のことをもう少し詳しく聞きたいんだが。マックイーンやネイチャを勧誘する時ときもかなりの確信を持って決め打ちで選ん
だけど、今回のドーベルさんの勧誘も、さつき話してくれたことよりもっと深いきっかけ

がありそうに見える」

その言葉を聞いたゴールドシップは真顔になり、ほどなくして泣き出しそうな顔で笑みを浮かべた。

「……おつちゃん、あんたすげえな。全部お見通しか」

「曲がりなりにも多感な子達とともにトレーニングをしてきたから、多少は心の機微きびがわかるようにはなった」

「そつか。……確かにおつちゃんにはそろそろ話すべきだな。結構長くなりそうだけど、時間は大丈夫か？」

「大丈夫。今日はもうフリーだ」

「わかった。じゃあ話すよ。今までの世界で誰も信じてくれなかった、『狂った』一人のウマ娘の荒唐無稽こうとうむけいな世界語りを——」

第二章 ゴールドシップ、七百年目の昔語り

「アタシはずっと、同じ時間を繰り返している。詩的に言うのと、さしずめ世界の理ことわりとやらに嫌われて正常な時の流れから追放されちまったってところか。……もうそれが七百年にもなると言つて信じるか？」

ゴールドシップの語りは、その始まりから俺の想像をはるかに超えた。とてもではない、普通であれば信じることができない。しかし、今目の前にいるゴールドシップからは、その言葉を裏付けるようなオーラが感じられた。この雰囲気は、単に十七年生きてきた子に出せるものではない。ゴールドシップの問いに、俺はその目を見て頷うなずいた。

「信じてくれるんだな。アタシが言うのもなんだが、疑うそぶりすら無く初っ端から信じ

るって言うてくれたのはおつちゃんが始めてだ。まあ、ここからまだまだ信じられない話が続くし、話半分聞き流してくれ」

「アタシが繰り返す時間の長さは、その時によって違ってた。初めて時間が過去に戻ったと自覚したのは、確かデビューから一年ちよつと、皐月賞さつきしょうの後だったか。妙に調子が悪くて全然走れなくてさ、初めて二桁順位になった時だった。悔しくて泣きながら中山レース場を飛び出して、九十九里浜までずつと走って、泣き疲れて砂浜で寝て、目が覚めたらなぜか寮の部屋にいた。誰か運んでくれたのかと思って時計を見たらデビュー一か月前の日付だった」

「一か月、『前』？」

目が覚めたら一か月後、だったなら長期間意識不明になってしまっていたという仮説を使つて説明することができなくもない。しかし一か月前ともなると、時計が壊れているか疑うところだ。

「目覚まし時計が一か月前、そのへんに転がっていたスマートフォンの日付も一か月前、テレビをつけたらそこに出てきた日付も一か月前だ。世界が壊れてしまったのか、いやア

タシが壊れてしまったのだった」

確かにそうなるに違いなかった。俺なら引きこもり一直線かもしれない。

「何が起こったか全く分からなくて、半狂乱はんきやうらんでたづなつちに突進したのを覚えてる。たづなつちとちんちくりん理事長は変わらなかつたけど、それ以外はなんか微妙に人が入れ替わつてたりしてさ、もう混乱しかなかった。アタシのトレーナーもいなくなつてて別の奴にすり替わつたみたいになつてさ。当然絶不調もいいところで、そのトレーナーとどうにかトレーニングをやり直したけど、メイクデビュー出走が一回目から半月遅れた」

「トレーナーが最初と違つていた、か。調子が狂うどころの話じゃないな」

同じ世界の繰り返しのように見えて、しかし完全に同じではない。ゴールドシップの語りはそう述べるものだった。自分が好んで読むSF系の小説にこうした時間ループ系のものであるが、多くの場合は登場人物は全く同じで、ただそのループごとにやることが少し違つていたり、自分の意志で出会う人を変えるというもので、そもそも出会う人自体が変わつてしまつていくというのは、今のところ読んだことがなかつた。

「アタシの交友関係も微妙に違つてたんだよな。さすがに仲良かったやつと敵対していったなんてことはなかつたけどさ。よくつるんでいた奴を見かけないなと思つたら学園に最初

から在籍していなかったりだとか、仲良くしてた奴を見つけて突撃したら『ひつ、ゴ、ゴールドシップ……さ、さん』って悪魔でも見るような表情されたらへこむよな。もうヤケ酒だつて思つて、この見た目で歳ごまかして酒を買つて飲んで寝た。すつげーまづかつた」

「……酒の件は今現在のことじゃないから不問にしよう」

「ありがとな、つて言うのも変だな。もう遠い世界、遠い昔の話だ」

お互いお茶を一杯飲み、話の続きを始めようとしたところで視界の片隅に怪しい動きを感じた。……扉の外、隠れたように隠れきれていない子がいる。トレードマークの赤いメソコが摺りガラスの外に見えた。幸い、ゴールドシップはその子の存在に気付いていない。盗み聞きは良くないが、今回の話は聞かせても問題は無いだろう。

「この繰り返しは、長い時はデビューからシニア級三年目の終わりまで走つてトウインクル・シリーズを引退する時まで続いた。短い時はデビュー戦終了直後にいきなり気を失つて、デビュー前に戻っていたな」

「デビューからシニア級三年目までというところ、デビュー前トレーニングも入れて六年くらいか」

「だな。二十歳で祝杯を挙げた次の日に身長が縮んで、筋肉も細くなつて、髪の毛も短くなつた上に胸もペタンコになつたらもう夢かと思うよな」

胸が……とうっかり視線を向けてしまつたのをゴールドシップに目ざとく見つけられてしまつた。ゴールドシップのシリアスな表情が少し薄れてニヤニヤ成分が加わつた。

「おっちゃん、この胸がペタンコになつたの想像したろ？」

「してないぞ？ だから自分の手でユサユサするのはやめろ」

「ちよつとシリアス過ぎたからおっちゃんをからかつて場を和ませようとしたんだ。……

ご希望なら後でいくらでも胸を貸すぜ？ いろいろな意味で」

「借りんぞ、いろいろな意味で。……多分胸を貸すのは俺の方だ」

「……そうかもな」

「ループが五十回くらいになつた時にとうとう狂つた。何をどうやつても、どんなに長くても引退後から先に進めない。何度か一時的にトレセン学園をトンズラしてたことはあつ

たけど、百回目の時くらいに全てを放棄してトレセン学園を完全に辞めたことがあった。北海道でいろいろな仕事を転々とした。最終的にはスベの実家で仕事を手伝つててさ、このまま勤勉を極めようと思つたわけよ。このアタシがだぜ？ ……つておつちゃんはアタシの奇行ぶりを知らないんだつたな」

「なんかこの数日でだいぶ経験した気がするから多少は察しがつくが、確かに俺が見ている真面目モード一辺倒だつたらちよつと怖いな」

「怖いか。まあそうだな」

ゴールドシップが昔を懐かしむような目をした。昔を思い出しつつ話すことはかなり大変なことだ。特に自身を狂わせる原因となつたことなら尚更だつた。ゴールドシップの心は今回こうして語ることで新たにダメージを負っているかもしれない。引き続き注意せねば。

「勤勉なアタシなら神様が何か助けてくれるかなつて、柄にもなく願つたんだ。でもダメだつた。トレセンを辞めて三年経つたある日、寝て目が覚めたら過去の学園に逆戻り。もう独りじゃどうにもなんねえつて悟つた。だから、次はこの状況を打破するための仲間探しを始めることにしたんだ」

「これまでのループの状況は、部分的とはいえメモを残して次に引き継いだ。それを見て、特定の人物と一緒に活動していた回は比較的長く活動できたことがわかった。その一人がマックイーンだったんだ」

なるほど。マックイーンに執心しゅうしんしていた理由のひとつはこれか。

「デビュー前にマックちゃんを捕まえて仲間になると、少なくともシニア級一年目までは確実にたどり着ける。だからアタシはマックイーンを何が何でも捕まえた。それこそ今回みたいな拉致らちまがいのことだって何度もやった。時には仲間にできなかつたどころか、メジロ家に追われてバッドエンドさ」

「バッドエンド？」

「……どうなったかは聞かない方がいい。あえて語るなら『メジロにされた』だ」

「メジロにされた？ それはどういう状況だ？」

「そりゃあもちろん、身も心もメジロになることさ」

トウインクル・シリーズにおいて大いなる功績を残し、ウマ娘の競走競技界を牽引し続けている高貴な一族だからいろいろありそうなのは想像がつくが、でも何だかよく分から

ない。もしや洗脳……などと不穏な考えが頭をよぎったが振り払った。いかんいかん、もしそのようなことがあったとしてもそれはゴールドシップが言うところの遠い世界の話だ。

ここでまた一息。ふと扉の方に目をやると、ガラス越しに見える人の姿が二人に増えていた。……あとでスイーツを削減するかどうかはゴールドシップに任せることにしよう。

「次の鍵はナイスネイチャだった。ネイチャはどのループでも不動点のように、同じように活動して、同じように活躍して、いつも三着だった。いつかのループだと有馬記念を三年連続で三着なんて偉業を達成したから恐ろしい力を持つてるもんだと思つたが、このループでも、他のループでも、ブロンズコレクターなのを面と向かつて言う^すと拗ねてしまつて、その回のループは必ず失敗した」

外でガタツと誰かが動く音がしたが、幸いにしてゴールドシップの耳には届かなかつたらしい。ウマ娘の耳はかなり小さい音でも捉^{とら}えることができる^とと聞くが、俺との話に意識を集中していたせいだろうか。

いつも三着。ゴールドシップの言う通り、我々の競技世界では俗に『ブロンズコレク

ター』とも呼ばれる業績で、入着してメダルを獲れる力はあるものの勝ち切れないことを指す。もちろん、G I級レースのブロンズコレクターともなればもう上位中の上位選手で、ほとんどのウマ娘が敵う状況ではない。ましてや有馬記念である。人気投票で大いにファンの支持を集められなければ出ることも叶わない。そのループのナイスネイチャはとも愛されていたのだろう。

「ひよつとしてネイチャがシニア級二年目でトウカイテイオーに勝てたらループを抜かれるんじゃないかと思って、あるループでネイチャをしごきにしていって勝たせたんだが、ピースが足りなかったらしい。ネイチャの祝勝会を兼ねた数日遅れのクリスマスパーティーで酔っ払って寝たら四年前の春に戻っていた」

「……話の腰を折ってすまないが、たぶんシニア級二年目だと、どの年にデビューしたとしても二十歳になってないよな？」

俺の問いに、ゴールドシップは少しめんどくさそうな、でもどちらかと言うと哀しげな表情を浮かべた。

「ずっとループを繰り返してたからさ、体感的には二十歳どころか二百歳超えてたんじゃねえかなあの時。ちよつと気が緩んだというか、もう酒でもかつ食らつてなきややつてら

んなかったんだよ。時効ってことで許してくれ」

「まあ、さつきも不問って言ったしな。だいたい、過去の世界のことを今日のゴールドシップに責任取らせたって意味ないだろ？」

「それもそうだ」

* * *

「ここからがさらに荒唐無稽ことうむけいな話になるんだが、あるループではそもそもウマ娘が世界にいなかった」

ウマ娘がいない世界。俺には全く想像もつかない世界だった。ヒト族とウマ族との人口構成比で確かにウマ族の比率は低く、どんなに多く見積もっても5%程度にとどまっていたので、日本国内でも地域的偏りでウマ娘がほとんどいないところもあったりする。しかし、世界中のメディアがアスリートウマ娘をこぞって取り上げるため、知らない人は皆無と言っている。

「ウマ娘がいなくなると、その世界ではゴールドシップだけがウマ娘だったのか？」

「いや。アタシもヒトみたいになつてき、耳がウマのそれからヒトのように顔の両側につく感じに変わつて、尻尾しっぽも無くなつてた。ウマ名も持つてなくて、手持ちの身分証明書だとヒト名だけが書かれてた。なんだつたつけな、ホシハタなんとかかんとかつて。変わった名字だつたな」

ヒト耳になつて尻尾が無いゴールドシップを想像してみる。印象が変わるような、あまり変わらないような。

「その世界にはもちろんトレセン学園も無かつた。ウマ娘がいない代わりに、四本の足で走る動物がいて、それが『ウマ』と呼ばれてた。この世界の生き物でたと喩えるならそうだな、ウシを小さくスリムにして脚をもう少しだけ長くしたやつに、キリンよりだいたい短い首をくつつけたつぽい姿だ。ヒトとは違う言葉を喋つてたが、アタシは理解できた」

小さくてスリムで脚が少し長いウシに、キリンの首を短くした感じの頭をくつつける：
：なんだろうな、その変わった動物。よくわからない。

「そこだと『ウマ』を表す漢字の点の部分が四つになつていた。ウマの一部が『競馬場』という所で走つていて、そのウマ達がトウインクル・シリーズで走る連中のようになつてたんだ。」

たまたま観に行つた日のレースに、アタシと同じ『ゴールドシップ』つてウマがいて、なんかアタシみたいな走りで勝つてやんの。スタンドでそいつのを見てたら、そいつがアタシの方を見て舌をベロンベロン出してきてさ、直接声を掛けてこなくて黙っちゃいたけど、アレは間違いなく挑発だったな。腕をまくつて乱入しようとしたら警備のおつちちゃんに捕まつて怒られた。ヒトの体つて全然力出ねえのな」

ゴールドシップみたいな性格の、四本足で走るその世界のウマは、話を聞く限りではかなり頭が良さそうだった。同じ名前を持つ者どうし、惹かれあうものがあつたのかもしれない。

「結局そのへんな世界にいたループは半年くらいだったけど、アタシと同じ名前のウマを起点にいろいろ調べたら、これが結構な手掛かりになりそうだったんだ」

「ほう」

「その世界のゴールドシップ、アイツは男だった。ボバだかロバだか言われてたが、とにかくアレがあつた。最初は分かんなかったけど、図鑑を見てこれは立派なものだと」

「そうか」

「反応薄いなおっちゃん？」

「……どう反応しようとセクハラで人生終了しそうだったからな。保身は重要だ」

「クビになったらアタシが養やしなつてやるよ」

「その言葉は大切な人にとつとけ」

ゴールドシップがどのくらい本気かは分からないが、心が弱つていると勘違いして転がりやすいものだ。余計なことは言わせないに限る。ゴールドシップが何やらボソボソとつぶやいていたがスルーした。

「……はあ、まあいつか。で、だ。その世界のウマの血縁関係なんだが、アタシとマックイーンは全然生きている時代が重なってなくて、マックちゃんはなんとアタシの母方の父親だつてさ。じいちゃんだぜじいちゃん。マックイーンじゃなくてマック爺じいだわ。今度から呼んでやるっかな」

ドゴン、と扉の外からひときわ大きな音がした。ガラス越しの影が揺れ動いている。おそらく、おじいさん呼ばわりされたので乱入してゴールドシップをとちめようとしたところを、ネイチヤに全力で押さえ込まれていると思われた。ここまでくるとゴールドシップが気付いていないのがおかしいくらいだったが、今の表情を見る限りはその余裕は未だいま

無いままのようだった。

「アタシとマックちゃんはこつちじや血縁関係はなくて逆にアタシの方が年上だもんな。ヘンな感じだった。ループを抜きにしても十五歳と十七歳、ループ込みで今の世界の歳を見るとアタシがもう七百歳だ。爺さんと孫どころじゃない、戦国時代と令和の世くらい違う」

「確かに、なあ」

「ちなみにあの世界のネイチャはマッククイーンの一歳年下で、アタシがいた時も元気に生きてたな。せつかくだから北海道まで会いに行つた。あの世界のネイチャは超長生きなおじいちゃんだった。あの感じだとあの世界のウマの最長老だつて夢じゃないかもしれない。ちよつとオバサンくさいことがあるネイチャにそっくりかもなとか……あ、これはオフレコな？　ヘソ曲げられたら今度こそいろいろな意味でジ・エンドに違いない」

……ジ・エンドかもしれないな。外が一層騒がしくなっていた。暴れるネイチャをマッククイーンと……あれはドーベルさんか、二人掛かりで取り押さえているようだった。とりあえず、世界が終焉しゆうえんを迎えたり、ゴールドシップが現役引退に追い込まれないよう注意せねば。

だいぶ話が長くなり、もう外は薄暗くなっていた。小腹こぼろが空いてきたところだったので、お茶を淹いれるついでに茶菓子も引つ張り出した。

「へんな世界での血縁関係とかそれ以外の関係とかで関わっている連中がこの世界を抜け出す鍵になるとすると、あとこちらに引き込む候補はトーセンジョーダン、エイシンフラッシュ、キタサンブラックとダート路線のホツコータルマエあたりだな。ジョーダンとフラッシュはもうトレーナーがついていたと思うし、キタサンとタルマエは今度入学だから、さしあたり二人を探すか」

入学予定者名簿を参照すると、確かにキタサンブラックとホツコータルマエの名前があった。ゴールドシップがこの二人の入学を知っているのは、過去のループから判断していることなのか、それとも単に名簿を何らかの方法で見たのか。いずれにせよ月末には校内の掲示板に張り出されることになっている。

「わかった。その二人はすぐにはチームに加盟してもらえないけど、それこそ『優先交渉権獲得済』みたいな感じでこちらに誘うことにしよう」

「サンキュ」

「そうだ、ゴールドシップ」

「なんだ？」

「マックイーンとネイチヤを勧誘かんゆうした理由は分かったが、ドーベルさんはどんな理由で勧誘したんだ？ 今日午後、本人相手に説明していたことだけじゃないような気がするんだが」

ゴールドシップが今日何回目かの哀しげな表情を見せた。遠い過去を懐かしむような、二度と手に入れることができなくなったことへの絶望のような。表で見せる破天荒なおちゃらけモードとは対照的で、俺の前だけで見せるシリアスモードのさらに極みを行く、今にも壊れそうな、十七歳の少女そのものだった。

「そっか、そうだな……そこも話しとかないな……。ちよつと時間がほしい」

「無理に話さなくてもいいんだぞ」

「いや、これはおつちゃんには知ってほしいんだ。ある意味、今ここにいるアタシを作った大きなきっかけだったから」

お互いに沈黙すること五分。ゴールドシップの口が開いた。

「……ベルちゃんは、長い繰り返しですり切れたアタシの精神を取り戻してくれた大恩人なんだ。もう、あれも六百年前の話だな」

絞り出すような声だった。目も潤^{うる}んでいた。これはよくないと思つて右手を挙げて止めようとしたら、首を横に振られた。それをされるともう止めることはできなかった。

「ベルちゃんがいなかったら、アタシはどこかで死んでいたかもしれない。身体は死んでなくても、心は死んでいたかもな。死んだ心で全てを捨てて、永遠に世界を繰り返していたかもしれない」

沈黙。ふと窓に目をやると、外はすっかり暗くなっていた。年度末とあつて学園内はひっそりと静まりかえつていて、先ほどまでは時々ドタバタしていた扉の外の三人も、息を潜めるようにとどまつていた。

「……そうだな、あの頃は世界脱出が早々にできなくなつてヤケになつて、全部壊してしまおうと思つて、でもずっと寂しくて、学園のやつらを全員、虜^{とりこ}にして何もかもめちやくちやにしてやろうつて思つてた。いや、現にやつてほとんど成功させた。アタシは黙つてれば美人だろ？ 美人を演じて、今のこんな感じで落ち着いた素振^{そぶ}りを見せて、みんな

をオトしてアタシのものにしてた」

さらりと言ったが、美貌を武器に全員を我がものにしたというのは尋常でない。その姿は、おそらく孤独な女王と表現するのがふさわしかりう。

「相手がいらない連中は簡単にアタシのモノになった。カップルだって破局させた。……いや、外から見たらあつちが勝手に好きになつて彼女と別れるつてやつなんだが、あえてそうなるよう誘導していたようなんだ。ほとんどはウマ娘どうしのカップルだったけど、時にはウマ娘とトレーナーとの信頼関係にひびを入れたみたいだ」

「ウマ娘とトレーナーとの信頼関係、ねえ」

多感な十代の少女と学園で多数を占める二十代の男のトレーナー、二人三脚で活動をしていけば信頼関係は当然築かれていくし、時には恋愛関係に発展することもある。自分の同期にも何人か、専属トレーナーとして共に歩んできた子と結婚したり、将来の結婚を誓つたりしている。俺はわりと早い時からチームのサブトレーナー、そしてチームトレーナーとしてやって来たため、そのようなものとは無縁だった。

「ああ。信頼関係がなくなつたらもうレース出場どころじゃない。たぶん結構な奴らのレース人生を絶つてきたと思う。ひでえ奴だろ？」

その問いかけには、沈黙をもつて返すより他なかった。冷たい言い方をすれば、いかなる理由にせよ、心揺れるウマ娘をきちんと支えてレースを続ける道に導けなかった時点でトレーナーとして力不足なのだから、お互いのためにも関係を解消するのが最善だっただろう。

「……まあ、ウマ娘どうしのカップルを引き裂いた時は、カップルが両方ともアタシに墮ちたら何も起こらねえけど、カップルの片方だけがアタシに引き剥がされた場合なんかは相手から恨まれまくって最悪刃傷沙汰、アタシに惚れた子達からも他のやつを見るな、つて嫉妬されて結局恨まれることになった」

「もう学園はメチャクチャだった。アタシが歩けばみんなが殺到するし、授業時間中だつて時には誰かが乱入してきた。トレーニングも成立しなくなつてた。一か月はそれが続いて、結局騒ぎは鎮圧されたけど、トレーナー達からは危険人物扱いされて遠巻きにされるし、アタシを処分する規則がなかったから処分されなかつただけで、むしろ何かしら処分された方がマシだった。学園にはもう居場所がなかった。日がな一日雲を眺めて過ごしてた。そこで会ったのがベルちゃんだった」

ドーベルさんの名前が出て、いよいよ話の根本に入った。

「道端にスケッチブックが落ちててな、誰のか確かめようと思つと中を覗いたわけよ。学園の生徒達が美しく描かれてて、思わず引き込まれた。持ち主のベルちゃんが走つてきて自分のものだからと言うから返したんだけど、その時にちよつと魔が差して、アタシを描いてくれないかって頼んだんだ。で、その日の放課後に描いてもらった。美しく描いてもらつて嬉しかったぜ。それが縁でベルちゃんとはポツポツ交流するようになって、たまに相談に乗つた。ベルちゃんがエリザベス女王杯を制覇した時は我ながら嬉しかったよ。……まあ、告白とか？ されちゃつたのもあつたな？ 嬉しかったし、一年くらいお付き合いをしてたけどさ、結局アタシはその世界に留まらなかった。……世界から弾き出される直前に、女王様からのキスを頂いたよ。……今でも思い出す」

ありていに言えば、恋愛関係にまで至つていたのだろう。しかもとても深い関係を築いていたようだった。ついにゴールドシップの目から涙が零れたが、見なかつたふりをした。

「それ以降、ベルちゃんを追うことが増えたな。ベルちゃんもループ脱出のための鍵だつてそのループで会った奴に教えてもらったし、……きつと、何としても見つけて、面影を追いたかつたんだと思う。それぞれの世界のベルちゃんにしてみれば、世界すら違つて全く知らない別の女の子のことを重ねて見られてたら嫌だよな。一度はそれで不幸にしてしまつた。今でも悔やんでるよ」

「……そうか」

「……そこで気安い慰めなぐさの言葉をかけずに、ただ聞いてくれるおっちゃんは好きだ」

「そもそも恋愛の経験がないから、何かを言おうとしても何も言えないだけなんだがな」

「なまじ経験がある方が、かえつてどうしようもないアドバイスになつてしまふかもしれない。恋愛経験こゝろじゃなくて人生経験がモノを言いそうだ」

確かに、沈黙が最大の慰めになる時もあると、過去何回かの経験で学んだ。

「今までのループだと、ドーベルさんはどんな活躍をしてたんだ？」

「ベルちゃんの人生はループごとにかなり違つてた。例のループの次の時なんかは、トレセン学園じゃなくて直接漫画家になつてたな」

「漫画家か。まあ確かにトウインクル・シリーズにその名を刻むメジロのウマ娘だからと言つて、必ずアスリートになるべしという訳でもないしな」

「だな。その時はすぐに関係を築けていろいろ楽しく過ごしたけど、大変なループの時はファンレターを一杯送つて、たまにあるサイン会には毎回参加して、なんか名前を覚えてくれたあたりでループ終了。だから今回はさくつとチームに加わつてくれてとても嬉しかった。おっちゃんのおかげだよ」

「こんな感じの暮らしが七百年続いてきたのか」

口にしてみて、改めて途方もない年月だと思つた。

「今が二百四十八回目になる。ずっとメモを取つてきちんと数えてきたんだぜ？」

「俺ならもう人生を経験し過ぎて廃人になつていてもいいかもしれない」

「ヒトの精神は長く保たないつぽいけど、やつぱりウマ娘だからか？ アタシ自身の感覚だと特に狂つたという感じもない。おっちゃんから見たらどうだ？」

「特に異常は感じられない。至つて普通の十七歳の女の子だ。ちよつとやんちゃで、時々シリアス」

「……おっちゃん、実は人たらしだろ？」

「だいぶ前に幼馴染おきななじみから言われたような気がしなくもない。『もし幼馴染じゃなかったら普通に付き合ってたかもね』とかなんとか」

「それにどう返事をしたんだ？」

「そうか、つて」

「……その幼馴染とはまだ連絡を取ってるか？」

「ああ、今日も出勤前の早朝から愚痴ぐちトークに付き合わされた」

「週末花束持つてけ。ついでにプロポーズもしろ」

「なぜに」

「先約に筋は通さねえとな」

「なんだかよく分からないが、一応予定だけはしておくか。」

「こうやってずっとループし続けてきたんだが、今回、初めてイレギュラーが起きた。それがおっちゃんだった。アタシのことを知っているべき人生や立ち位置なのに全く知らない。とても不思議で、不可解。もちろん、単におっちゃんが記憶喪失になってみんな忘れ

でしまつていただけかもしれない。でもアタシはそこに賭けてみることにした」

「賭けか」

「なに、失敗したらまたやり直すだけさ。また数百年かかるかもしれないけどよ」

また数百年と事も無げに、むしろあえて茶化すかのように言ったが、その声がわずかながら震え、目に不安と恐怖の表情が現れていた。それもそのはず、もう七百年経つてしまつた中で、人生を賭けたくなるようなチャンスに恵まれたのに、もしふいにしてしまつたらと思うと自分でも同じようになるに違いなかつた。

「さて、話はこんなもんな。なかなか面白いSFだつたら？ さすがに信じられ——」

「信じよう」

ゴールドシップの言葉に被^{かぶ}せるように答えの言葉が出た。

「信じてくれるのか？」

ゴールドシップの目を見つめて、一回頷いた。

「やつぱおっちゃん何かヘンだな。……でも、嬉しいよ。今までで一番この話を聞いてくれたアグネスタキオンだって、最終的には決め手に欠けると言つて態度保留だつたらさ」

「そうなるのは仕方ない。だが、俺はいろいろ話を聞いて、ゴールドシップが語った話が本当だと確信した。まだ確固たる根拠は得られていないが、これから調べて解明している」

「おっちゃん……」

今度こそ涙をぼろぼろと零し始めたので、箱ティッシュを丸ごと差し出した。早速ティッシュを三枚ほど取って涙を拭ぬぐいつつ、少し笑いながら言った。

「そこはハンカチを貸してくれるとこだろ？ 『洗って返します』『いや、あげるよ』というお決まりのパターン」

「そういうのには疎うといから期待するな」

「そっか。まあ、そういうおっちゃんのことであらゆる意味で好きだぜ」

「それはどうも」

「わりと本気なんだがなー。さて、メンバーの勧誘とトレーニングを頑張らないとな！ おっちゃん、これからよろしくな！」

「よろしく」

* * *

話を終えたゴールドシップがトレーナー室のドアを開けた途端、人がなだれ込んできた。

「ぎやつ」

「あつ」

「グエエ……」

「マックイーン、ベルちゃん、ネイチャ……どこから聞いてた？」

「え、えーと、……『アタシが長い間同じ時間を繰り返している』あたりから、デスクネ。アハハハ……」

「私はもう少し後、私を捕まえて仲間にするとか少なくともシニア級一年目にはたどり着けるとかなんとか、というあたりですわ。立ち聞きしたのは謝罪しやざいします」

「……その、どこかの世界で、その、あなたに、キ、キスしたって……」

「話の大半というか、ネイチャなんかほぼ全部聞いてんじゃねえか……おっちゃんは怪しい雰囲気か何か気付いてたか？」

「いや、全く」

しれつと嘘をついた。全ては明るみになったのでもはや自分が立ち聞きを知っていたかどうかは些細なことである。些細なことだったことにする。

「まあ、狂った話さ。アタシはこんな感じに狂ってる。アタシとつるんでいた連中がまとめて話を聞いたのはこのループが初めてだ。今まではずっと秘密にしてたか、ごく限られた人にしか話してなかったからな。どうする？ チームに入らないって決めるなら今だぞ？ アタシがこの世界から弾かれて次のループに行くのに何年かかるかは分かんねーけど、またやり直ささ」

「ゴールドシップさん」

マックイーンが静かに言うのと、ゴールドシップのもとに行って彼女を抱き締めた。

「マックイーン……」

「どこか別の世界では、貴方は私のかわいい孫らしいですわね。ゴールドシップさんより若いのおじいさんだなんて少々納得が行きませんが、まあ何かしら相通ずるものがあるとは感じておりました。こういう時はおじ、コホン、おばあちゃんに甘えなさいな」

「アタシがゴルシよりもずっと年上のおじいちゃんかー、ま、アタシらしいお似合いな感

じだね。でもオバサン扱いしたのは許さないからね？」

「その、……どこか別の世界でも、この世界でも、ファンになってくれて、ありがとう」

「おまえら……」

さつき拭った涙がまた零れ始めた。ゴールドシップよりも小柄なマックイーンに抱き締められたまま、しゃくり上げる声が大泣きに変わるまでさほど時間はかからなかった。

まるで三歳の少女にでも戻ったかのように泣き続けるゴールドシップを見守りながら考えた。ここまでのゴールドシップの話信じることは確定事項だ。人を騙す^{だま}にしてはスケールが大き過ぎる。アグネスタキオンは最終的にこそ態度保留としたらしいが、それでも途中で否定しなかったあたり、可能性としては想定しているのだろう。いずれ相談に行くのもいいかもしれない。

偶然ではあるけれども、チーム全員が同じ地平に立つことができた。この勢いでチーム活動を始めよう。トレーニング計画、レース計画、世界の謎を解く活動など、やることは山積みだ。倒れないようにしなければ。

第三章 チーム結団

1 トマトケチャップボトルフルスイング事件

『倒れないようにしなければ』

そう決意した昨日の今日で倒れた。

気づくと学園の保健室のベッドだった。日頃からよく睡眠を取っていたし、奉仕活動が

てら適度な運動もしていたし、決して過労で倒れたのではないはずだが。ベッドに横たわったまま右を見ると、縄でぐるぐる巻きにされたゴールドシップとマックイーンが正座させられていた。首にかけられた札を読むと、マックイーンの方は、

『私はWBCをテレビで観戦していた時に、興奮してトレーナーさんの頭をメガホンフルスイングで叩きました』

と書かれていた。ゴールドシップの方の札には、

『アタシはマックイーンのメガホンをトマトケチャップのボトルにすり替えました』
とあった。だいたい何があつたか察しはついたが、一応その隣で額に手を当てて渋い顔をしていたネイチャに尋ねてみる。

「一応聞く。何があつた」

「だいたいご想像の通りですよ、ゴルシがすり替えたトマトケチャップのボトルを、マックイーンが盛大に握りつぶしつつトレーナーさんの頭に叩きつけたので、……わかりますね？」

「あ、ああ……」

「衝撃で気絶したトレーナーさんがトマトケチャップべつたりの状態で動かなくなったの

で、トレーナーさんを殺^やつてしまったと動転したマックイーンが、ゴルシの口車^{くちぐるま}に乗せられてトレーナーさんを運び去ろうとしていたので止めました。そして我に返ったマックイーンが噴水に身を投げようとしたので縛り上げました。ゴルシは逃亡しようとしたところをエアグルーヴ先輩に成敗されていたので、身柄を引き受けてきました」

「……お疲れ、ネイチャ」

「ネイチャさん今日は猫モフって帰りますね……」

ヨロヨロヨレヨレになつて帰つていくネイチャを見送りつつ、横の奇人コンビをどうしたものか考える。

もともと今日は授業が休みで、スケジュールを練る日として誰も集めていなかったし、特に来る予定も無いだろうと思つていたのだが、昼少し過ぎにマックイーンがトレーナー室に乱入してきて、

『そのテレビ貸してくださいませ！ 大画面で観たいんです！』

と言つて、野球の観戦会場にしてしまった。自分は野球についてあまり詳しくはないけど、マックイーンが興奮しながらいろいろ解説してくれた。かなりまくし立てる感じではあつたが結構楽しめていた。試合途中でもマックイーンは右手に持つていたメガホンで自

分をポコポコ叩いていたものの、いつの間にかトレーナー室に来ていたゴルシが一瞬のすきを突いてメガホンとトマトケチャップのボトルをすり替えたらしく、それをクライマックスでフルスイングして以下略。

「トレーナーさん、本当に申し訳ございません」

「その、な、昨日超シリアスにしちやつたろ？　ここらでちよつとギャグに振り切つて中和したかつたんだよ……」

「理解した。……あーもしもしたづなさん？　ゴールドシップはあと一週間ほど生徒会の世話になりたいそうです」

「やめてくれ！　後生ごしやうだ！」

ガチで泣きわめくゴールドシップを訪ねてきたたづなさんに引き渡し、自分の頭にケガがないことを保健室の先生に確認してもらった後、項うなじ垂れるマックイーンとともにトレーナー室に戻った。

まずは飛び散ったケチャップを拭き取らなくては。手分けしてティッシュやモップを使って綺麗にした後、応接スペースでマックイーンと向かい合つて座った。

「マックイーンって、結構面白い？」

「返す言葉もございません……」

「まあ、ストイックの中にも一服の清涼剤せいりょうざいとしての笑いが必要だからな。楽しく行こう」

「はい……」

マックイーンと一緒にたつて野球を覗いてたため、午後からの仕事らしきものは未着手のまま積み上がっていた。仕事に戻るか、今日はこのまま何もせずに終えるか。トレーナーの業務時間はかなりの裁量があるだけに、計画がおざなりだと後でとんでもないことになる。八年間毎年の経験の教訓である。でも年度末締切の報告書は片付いたので問題なし。

「さて、マックイーンがいることだし、残る二人の勧誘計画を立てたいと思う」

「私、あまりその点ではお力になれるかどうかはわかりませんが」

「ブレインストーミングみたいな感じで行こう」

手帳を開き、昨日ゴールドシップが挙げた面々の名前を確かめた。彼女達は前回の選抜レースには出走していなかった。エイシンフラッシュとトーセンジョーダンがそれぞれ別のトレーナーとともに活動を開始していたのは事前の調査通り。また、ホッコータルマエは特に予定の変更などもなく、無事に新年度に入学することになっていた。つまり、勧誘

するならホッコータルマエとなるが、それは当分先のことになる。となると、さしあたりチーム結成要件をすぐに満たすには、次回の選抜レースに出てくる子達の中から探すことが望ましい。次回は再来週、年度末ギリギリの開催となるため、出走する子は確定していない。

「つまり、まだ動く時ではない、ということになりますわね」

「だな……」

となると、マックイーンが目の前にいるからこそできることは――

A. トレーニング計画の立案

B. 出走目標レースの検討

C. 週末のチーム全員によるスイーツ会のお店選び

「Cにいたしましたよう」

「まだ何も言っていないのに俺の頭の中を読んで回答しないで欲しい」

「スイーツは士気を高めるのに大変重要な要素です。私が調査したお店の中から、今回の

目的と予算にふさわしい店舗は——」

自分の疑問がさらりとスルーされてしまったことに涙を流しながら、お店選定に参加するのであった。

2 スイーツショップ出禁につき花見

週末。チーム名未定の新チームでの親睦会しんぼくかいの日。お店の最終決定を任せたマックイーンからは、全員朝八時半に学園の正門前に集合せよとお達しが出ていた。そのお店が開くのは十時だったから早過ぎるのではないかと言ったら、

「いいえ。土日は来店予約の整理券配布が九時半から始まりますので、この時間に集まって行くくらいで丁度良いのです」

「なるほど……それなら、たとえば俺一人が整理券を取りに行つて、その時間にみんなが集まるようにすればよくないか？」

「何をおっしゃいますの。チームの親睦会なのですから、たたスイーツを食べて終わりにするなどありませんわ。他にもいろいろとやりましょう」

「それもそうだな」

という感じで、適当にどこかで遊ぶことになった。俺と友人の付き合いだと、最近お互い忙しいこともあつて、お目あての店に直行して楽しんで、それじゃまた次回、みたいなことが多かったので、一日中遊ぶという発想が抜け落ちていた。いやまあ遊ぶのは彼女たちであつて、こちらはお目付役になる可能性が大だった。街中で愉快な事態になつて始末書を書かされるのは前回限りにしたい。

……そう言えば、前何回か婚活らしきものをした時に、デートプランをろくに考えられずに時間を持て余してしまつて、二回目以降のお呼びがかからなかつたことを思い出した。適当に回る練習にもなるかもしれない。

中高生女子グループの引率いんそつみたいな役をする時の服装を考えたものの、手持ちの服あまり良いものがなかつた。買いに行く暇もなかつたし、ここは限られた選択肢から最善を尽くす。よしこれだ、と選んだ服を着て集合場所に向いたが――

「じじむさいですネトレーナーさん」

「……なんか四十代に見えます」

「アタシはこんな感じがいいと思うけどよー」

「悪くはありませんが、やはりもう少し若さを生かした服装がいいのでは」

順番にネイチャ、ドーベル、ゴールドシップ、マックイーンの感想が得られた。一対三でじじむささ確定。

「というわけで、お店の整理券を取つたらまずは服を選びに行きましょう。よろしいですわね？」

「『賛成！』」

早速目的地が決まった。服を選ぶのはだいぶ時間がかかるし、これでいい感じに時間を使えるのではないだろうか。

そう思ったのだが。

「はいこちらどうぞー……、ッ！ 失礼ですが、メジロマックイーン様でいらつしやいますか？」

「え？ ええ、そうですが……」

「少々お待ちください！」

整理券を受け取りにマックイーンと自分が並んだところ、回ってきた店員さんがマックイーンの姿を見るなりとても驚いて、整理券配布の仕事を中断してお店の方に飛んで行ってしまった。しばらくすると店長らしきパティシエールを連れて戻ってきた。

「メジロマックイーン様、いつもご^{ひいき}鼠^{ねずみ}顧^{かん}くださりありがとうございます。まことに申し上げにくいのですが——」

店長の非常に丁寧な言葉を要約すると、マックイーンが来るといつも材料が底をついてしまい、お店が本当につぶれてしまうのでうちのグループの食べ放題は引き受けられない。今日は特に来店が多く見込まれるので、グループにつき一人一品限りで勘弁してくれ、とのことだった。

「マックイーン、今までののくらしい食べて来たんだ？」

「う……来るたびいつもスイーツバイキングコーナーを端から端まで……」

「……それ以上は聞かないでおく」

とりあえず他のメンバーを招き寄せて状況を伝えたところ、

「じゃあ買って帰ろうぜ。お店にいたらマックイーン絶対一品じゃ我慢できなくて泡吹いて倒れるぞ」

「ゴールドシップさんの中での私の印象について、後で認識を一致させる会議が必要なようですわね」

というやり取りで、テイクアウトの方向性で決まった。それを伝えると店長から泣いて感謝された。マジで何したんだこのパクパクステイヤー志望は。

みんなで一品選んで箱に入れてもらった後、どうしようかという話になった。

「ケーキは長時間持ち歩けないし、早めに冷蔵庫に入れるか、食べるかした方がいいと思います」

「ベルちゃんの言う通りだな。どこかで食うか？」

「寮の冷蔵庫か、トレーナー室の冷蔵庫に入れますか？　もしかしたらアタシの知り合いのお店で預かってもらえるかもしれないですが」

「うーん……あ」

ちよつと思いついた。

「みんなで花見しないか？」

* * *

急遽きゆうきよ決めた花見ゆえ、弁当や飲み物などを道中の商店街で調達した。敷物はどうかするかという話になった時に、

「こんなこともあろうかと、レジャーシートならアタシが持ってきたぜ！ ついでに水筒も！」

と、ゴールドシップが持っていたバッグの中から敷物を取り出した。何かいつもより大きいバッグだなと思つたらピクニックセットだったらしい。

歩いて十分ほどで目的地の公園に到着した。今年の東京はソメイヨシノの開花が早く、西日本の各地よりも先に咲き始め、場所によつては満開に近いところもあった。この公園も八分咲きくらいになっていて、花見客が結構来ていた。幸い空いているところが見つ

かったので、そこにシートを広げて五人で座った。

「みなさんお茶は行き渡りましたかね、では乾杯の音頭をトレーナーさんお願いします！」

「乾杯ッ！」

「みじかつ!」

あいさつは後回し。ひとまず一杯行こう。お茶だけだ。

「ささ、アタシの知り合いのおっちゃんおぼちゃん特製のお弁当をどうぞ」

商店街に立ち寄った時に、ネイチャのコネ(?)でおいしい弁当を急に作ってもらえることになった。他にも、ちよつとしたおつまみになるものを少々増量サービスつきで買うことができた。ネイチャ様と商店街の皆様ありがとう。

「プハーツ、あうめ」

「ゴールドシップさん、お茶をビールみたいなスタイルで飲んでますのね」

「お？ これビール」

「え!？」

慌ててゴールドシップが持っていたコップと脇にあった缶を奪い取り、ラベルと中身を

確認した。

「なんだ、ノンアルコールビールか。でも誤解されるからやめ……いや、ゴールドシップなら二十歳くらいだつてごまかしても大丈夫そうなスタイルだしな……」

「精神年齢に至つては七百歳オーバーだからもう仙人だぜ」

「貴方の行動を見てみると七百歳どころか七歳なんじゃないかと思う時がありますけれども」

「マックちゃんグサつと行くねえ、七歳ならおじいちゃんに甘えようかな」

「いきなり飛びつくのはおやめなさい！」

マックインとゴールドシップがわいわいやつていけるのを、ネイチャとドーベルと一緒に眺めていた。

「いきなり桜ガン無視の花見ですねえ」

「花より団子、だね。……別の世界のアタシがゴールドシップさんのことを好きになつたつて本当かなつて疑つてたけど、こういう明るくて楽しそうな人なら、今のアタシなら好きになる……かも」

「おお……今ネイチャさんは素直に相づちを打とうか、告白だと囁はやし立てる先輩になる

うか迷っています。ドーベルさんはどっちがいい？」

「え、あ、あああ、わ、忘れて！ ……ください」

実に楽しそうにやってきて、このチームならいい感じに切磋琢磨せつさくたくましていけそうだと、桜を見ながら感慨かんがいにふけた。

花見でケーキもすっかり味わった後は、次のミツシオン・俺の服選び。ゴミを持ったまま行くと大変なので、寮の自分の部屋に立ち寄ってゴミを置いてきた。

普段の服装は自分の勘で合わせていて、その結果が彼女たち若い中高生からの「じじむさい」評価だった。三十代の入り口に立ったから多少じじむさくてもいいかと思っていたけど、さすがに四十代っぽいと言われると少しへこむ。やはり普段から友人に見立ててもらった方がいいかもしれない。第三者の視点は大事だ。

近所の大きいショッピングモールに着き、彼女達に連れて行かれるまま一軒の専門店に足を踏み入れた。中々来ない店なので少々肩身が狭い。みんな揃ってなんだかずいぶん堂々としているなと感想を抱き、よく考えたら二人はお嬢様、一人は商店街のみんなと気さくにコミュニケーションをする姉御肌あねごはだ、もう一人は七百歳（自称）なので場慣れしてい

るのも当然か、と一人結論付けた。

「これどうよ？」

「なんかちよつと明るすぎないか？」

「いやいやトレーナーさん、これでも商店街の若づくりのおっちゃんより暗めの色合いだからね？ ベージュの明るめの感じとか、いつそ白に近いくらいでもいいんじゃない？」

「そうですね。明るめの色合いにするだけでも若い印象がつかます」

「アタシも、もう少し明るめの色の方がいいと思います」

「うーん、いくつか買おうと思うから、これもキープしつつ、もう少し明るい感じの物を探すか」

ひとまずこの店ではゴールドシップが選んだものを買ひ、次の店に行った。

いろいろ見て回って、シャツを三着、スラックスを二本調達した。

「すまん。俺の服の買ひ物に付き合わせてしまつて」

「気にすんな。チームのボスをかっこよくしてこそアタシらの面目が立つてことよ」

「私達のトレーナーさん、そして同志であればこそ、最高の服装で魅^みせてほしいもの

です」

「買い物のおとは、彼女たちの希望のままにショッピングモールを歩き回って買い物をしたり、ゲームセンターに行ったりした。

ゲームセンターにはトウインクル・シリーズで活躍するウマ娘たちをデフォルメキャラクター化したぬいぐるみ・パカぶちのUFOキャッチャーがあり、今活躍している子達のものがあった。いずれ我がチームの面々もキャラクター化されてここに並んだりするのだろうか。

「はいトレーナーさん！ これ！」

「ネイチャがUFOキャッチャーで早速誰かを取ってくれたらしい。そのキャラをよく見てみた。」

「この勝負服はスマートファルコンだな」

「正解」

「ファルコンさんってすごいですよね。いっぱい走って、いっぱい勝って、ウイニングライプだけじゃなくてウマドルとしての活動もして、ダートのレースを盛り上げて……漫画にしたら熱い展開になりそう」

「おっ、ドーベルさんの創作意欲が刺激されていますね。早速ストーリー組み立てちやう？」

「ちよつとアイデアを書き出してみようと思います」

ちよつと離れたガンシューティングゲームのエリアでは、ゴールドシップとマックイーンがコンピを組んで無双むそうしており、あたりに小さい子達やゲームのファンが集結していた。

「よっしやハイスコア更新！ やっぱマックイーンとアタシのコンピは最強だな！」

「初めてでしたけど、全体を見渡す能力と瞬発力を鍛きたえるには良いゲームかもしれません」

こうしてみると、ゴールドシップはなかなかサマになっている。美しくてかつよくて、その上いろいろな人と気安く付き合える人あたりの良さがある。自分と二人きりでいろいろ話す時の陰の入った感じとは対照的だった。

いい時間になったので、学園に到着したところで今日は解散にした。

「それじゃねえ」

「では、また来週に」

「ありがとうございます」

ネイチャ、マックイーン、ドーベルが寮に帰り、ゴールドシップと自分が残された。

「おっちゃん、もうそろそろ活動開始だな」

「ああ。忙しくなるな」

「トレーニングの方はアタシも手伝うよ。七百年の中で結構いろんな子を見てトレーニングをつけてきたからな」

「それは頼もしい。まずはトレーニング計画を立てないと」

「だな。頑張っていこうな」

拳を軽く合わせて、気合を入れた。

3 初回併走トレーニング、圧勝者ゴールドシップ

年度末、チーム名未定の我々のチームで、初のチームトレーニングをすることにした。まずは最新の体力スコアを測るため、筋肉量測定や短距離走、中距離走などを行った。まずはウォーミングアップからのコース二周。集団基礎トレーニングの時のスコアや所見と見比べつつ、身体の状態を見極める。

「はあつ、はあ……………つ、どうよ？」

「流石だ。今まで君を恐れてトレーナー契約を結ばなかったトレーナー連中は、せっかくの才能を放置した罪でみんなクビにしないといけない」

「言ってくれるねえおっちゃん」

「グエエエエ……………ゴルシ速すぎって……………」

「ネイちゃん、乙女が出しちゃいけねえ野太い声が出てんぞ？」

「そ、んなこと、言ってる……ゲエエ、場合じゃ、ない、か……ら、っ！ グフツ……」
「……おつちゃん、ネイチちゃんの名誉のために聞かなかったことにしてやってくれ。あるいは一生添い遂げる覚悟を固めろ」

「後者の選択肢は君が言うことじゃないと思うぞゴールドシップ」

疲れひとつ見せず飄々としているゴールドシップに対して、そのペースについていこうとして呆気なく体力を使い果たしてしまい、地面と一体化したナイスネイチャは微動だにしない。さらにその後からヨロヨロしながらメジロマックイーンもゴールにたどり着き、ネイチャ同様地面に倒れ伏した。

「ゴールドシップさんという勝負ができると思っていた、一時間前の己の浅はかさを反省しています……」

「無理やり食らいつくなと事前言っておかなかつたのは悪かった」

「まあ、いきなりアタシ超えだつたらもう今からでもGIにバシバシ出て行っていいくらいだしな」

「今から鍛えていこう」

撃沈していたネイチャとマックイーンがようやく起き上がったところ、トレーナー課程の授業が終わったメジロドーベルが来た。

「や、ベルちゃん今日もかわいいねえ、お姉さんとイイことしない？」

「こらゴールドシップ、いきなり後輩チームメンバーにコナかけんなコラ」

「過去の世界で永遠を誓い合った仲だぜ？」

「そういうのは今この世界できちんと段階を踏んでからにしろ」

「えつと、ちよつと心の準備があるので……」

「何年でも待つ！」

「それ以上困らせるな、そののタンポポの花全部数えさせるぞ」

「ぶー……ふんだ。あっちのタンポポ数えに行つちやうもんね。ふん」

ゴールドシップがいじけて本当にタンポポの花を数えに行つてしまったけれど、じきに戻ってくることは分かっているのでひとまず放置してドーベルの方を見た。なんか微妙に引かれている気がする。

「え、えつと……どうしてネイチャさんとマックイーンが泥だらけなんですか？」

「いろいろあつてな」

「初手でラスボスに挑んで討ち死にしたレベル一の戦士ですよー、ハア……」

「やはり地道な基礎固めをしなければ……」

「よく分からないけど、お疲れ様……」

ここからは、ドーベルのトレーナー見習い活動も兼ねてのメニューになる。さつきの走りで一応のタイムを取ることができ、コースに予め用意されている学園のビデオカメラと映像記録設備のおかげで、走っている時の様子もあらゆる角度から見ることができ、まだ戻ってこないゴールドシップを除くみんなで映像を覗き込み、課題点を挙げていった。

「ではまずネイチャの走りから。ネイチャが自分で見た時の感想、マックイーンが走る選手と同じ立場で見た時の感想、そしてドーベルがトレーナー的視点から見た時の感想を出して、どのような感じかを見極めていこう」

「はい、実はアタシ、一周目でバテバテでした……もう息が苦しくて、足もともに動かないし、どこを走っているかすらも正直わかりませんでした……こうして映像で見ると酷いもんですね、ちよつとへこんじやいました、うう……」

未だ疲れきった様子のネイチャが意気消沈していた。その横でマックイーンもだいぶ疲

れた様相を見せている。

「私はネイチャさんの後方にいましたけど、だいぶヨレているのが見えておりました。…人のことをとやかく言えないくらい、私も走りがブレていましたけれど……」

走った当事者からの感想を得て、ここからはドーベルの見解を出してもらおう。

「どちらも体力を使いきっている分、姿勢を保つ余裕が無くなっている感じに見えるかな。体力消費の度合いはやつぱり、微妙な距離適性の差だったたり？ ネイチャさんもマックイーンも中長距離寄りがいいって基礎トレーニングの所見にはあるけど、どちらかと言えばマックイーンの方が長い距離にも耐えられる感じ、かな」

「そうだな。ドーベルの見立てはなかなか良い。今回はゴールドシップに引つ張られて、今までよりもかなり速いペースで走っていたはずだから、体力が削られていたと思う。その結果、両者ともバテてしまったと考えられる。現時点では、マックイーンの方が長距離向きのスタミナを備えているけど、これは今からの方向性と鍛え方次第でどのようにも伸ばせるから、あまり気にすることではない」

続く流れでマックイーンの走りに注目して映像を見返す。コース取りはなかなかのものだったが、ゴールドシップに気を取られているのが、走っている際の視線の動きから窺え

た。これも初めてなのでこれから直していけばいい。総じて言えば、両者とも初心者であるものの、一定の力はあるという至極当然な見解になるわけだが。

「脚や他の身体の部分に痛みや熱っぽさはないか？ ケガや病気は選手生命どころか今後の生活にもかかわってくるから、少しでも気になるところがあつたらすぐに言ってくれ」

「疲労はありますけど、へんな感じというものはありませんわね」

「同じく」

「ならよし」

二人の走りを見終わつたところで、今度はゴールドシップが走っている様子の映像を見た。彼女は併走トレーニングの直前、スタートがあまり得意ではないとこぼしていて、実際、スタート合図を出した時に、ネイチャやマックイーンと比べて明らかにワテンテンポ遅れて走り始めていた。でもその先は、遅れなんて全く影響が無いといわんばかりに、あつという間に二人を追い越して先頭に立ち、悠々と綺麗なフォームで走つてゴールしていた。コース取りも良い。

「なんというか、もうこれで完成されちゃっているような感さえ受けますね」

「ゴールドシップさんはもう、メイクデビューから全戦全勝で走れてしまうような気さえしてしまいますわ」

「うん。気になるとしたら、今のゴールドシップさんが力の配分をきちんとして走っているのか、単にスタミナがあつたから何も制御せずに走り切ってしまったかは、まだ分からないね……」

「ドーベルは大変優秀なトレーナーになれそうだ。なんならもう飛び級で課程卒業目指すか？ みんな忘れて埃ほこりをかぶつた制度があるはずだけど」

「あ、いえ、飛び級は、そんな」

「まあ、無理は言わない。じっくり学べばよりすごいトレーナーになれるに違いない」
「恐縮です……」

そんな中、ゴールドシップが遠くからとぼとぼと帰ってきた。イジけモードが続行中だった。

「ふんだ。アタシ抜きでみんな楽しそうに盛り上がっちゃってさ。もうこれからトレーニングの時は地藏コスしかしらないからな。ふん」

「なんだ、せっかくゴールドシップがすごいという話をしていたのに。本人が嬉しがらないんじゃない？」

「そうですね。貴方の強さに感動して、私の足りなさを自覚して、これから頑張ろうと奮起したところですよ」

「ネイチャさんも同じような感じですよ。……もうちょっと頑張つて、どうせ同じ三着になるなら、G Iレースで三着に行ける強さになりたいですし」

「ゴールドシップさんって、すごいなって思いました。もつと研究して、一流のトレーナーになれるように頑張りたいって、そう思えました」

ゴールドシップの顔が少し赤くなり、への字になっていた口元が少し緩んだ気がした。

「ピコン！ ゴルシちゃんの機嫌が百億直りました。66億6666万6666がベルちゃんの言葉、一がそのタンポポパワー」

「俺らは完全に効果無しかよ」

「おっちゃんがアタシの機嫌をマイナス百億にしたのを、ネイチャとマックイーンが五十億ずつ補填してくれたんだから二人に感謝しろよな」

「訳分かんねえよ」

色々議論しているうちに割り当ての時間が終わったので、他のチームと交代して、我がチームは移動することになった。ゴールドシップ、ネイチャ、マックイーンの三人は着替えに行き、ドーベルと二人で先にトレーナー室に向かう。

「あの、アタシのことをだいぶ褒めてくれましたけど、そんなにすごいですか？」

「同学年の他の子よりも、選手のことをよく見ていると思うよ。その調子なら優秀なトレーナーも夢じゃない」

「そう、ですか」

「やはり、漫画を描く上で人をよく観察しているからかな？」

「それはあるかもしれませんが。ずっといろいろな場面で人の動きを見たり、実際にデッサンしたりしていますから」

「なるほどな」

「いろいろ見てきた中で、ゴールドシップさんの走りは、ひととき美しく見えました。やはり、二百回以上時間を繰り返してきた分の経験値、というものでしょうか」

「そうかもしれないね」

我がチーム……えーと、ああまだ名前決めてなかったな、とりあえず我がチームの活動は順調なすべり出しといつてもいい感じだった。

この時、俺達の姿を物陰から見ていた、謎の生徒二人組のことを知るの少し後のことになる。

「あれこそが、私達が尊敬する大先輩……」

「明日、決行だね」

「ええ……」

幕間 GCC (ゴールドシップ・クルー・クラブ)

放課後のトレーナー室。トレーナーは理事長に招集されて席を外していて、部屋の中にいたのは私とナイスネイチャさんの二人だけでした。

「マックイーンさんや、新しいチーム名について何かアイデアは出ました？」

「それが、しつくりくるものか思い浮かばなくて」

「このままだと本当にチーム『自重』^{じじゆう}になつてしまうね。アハハ……」

ゴールドシップさんにアイデアを出させるとんでもない名前になつてしまいそうですし、ここはもう一人のメンバーであるドーベルに聞いた方が良さそうですね。あの子、漫画をいろいろ描いているだけあって、ネーミングセンスはありますし。

「まあ、アタシはそのへんな名前でもいいかもしれないって、ちよつと思つちやつたり？」

なんか妙に友達からの受けがいいんだよねー」

「少々申し上げにくいのですが、ネイチャさんの御友人は独特の感性をお持ちなのでしょうか？」

「ズバツとヘンだって言ってくれてもいいよー。現にタンホイザは少し不思議成分があるし、イクノもちよつと天然入ってるし。同室なら分かるんじゃない？」

「イクノさん……大変真面目でお優しく、そのような方に天然なところは思い浮かばないのですが」

「まあ、身近だと補正が入って逆に見えなくなるのかも」

「なるほど……」

ネイチャさんが淹れてくださった緑茶を頂きつつ、お茶菓子を一口。実に最高です。寮の部屋に一袋備え付けておきましようか。あまり食べるとイクノさんから止められてしまうのでセーブしなければなりません。

二人で和んでいると、扉をノックする音が聞こえました。

「どうぞー」

入ってきたのは生徒さんが二人。初めてお見かけする顔でした。

「あの、こちらにゴールドシップさんがいると聞いて来ましたー……」

「こら、ピシッとして」

若干のんびりしたような感じがある黒髪の子と、それよりちよつとお姉さんのような感じのする、同じく黒髪の子でした。

「ゴールドシップさんはちよつと席を外しております、もう少ししたら戻ると思いますが……」

「まあ、すぐ戻ると思うから、お茶でもどうぞ」

ネイチャさんが二人を応接スペースに案内して、茶葉を替えて淹れ直した緑茶を出し、私はトレーナーさんのお菓子ストックから適当に見繕みつくろってかご一杯にして持つて行きました。

「しかしゴルシに会いに来る人で和やかな感じなのは珍しいねえ、大体の人はブチギレパワー百倍でトレーナー室のドアを壊す勢いで入ってくるし」

「そうですわね……」

ええ。ゴールドシップさんは方々で騒ぎを起こすので、被害を受けた他の生徒さんがよ

くこのトレーナー室のドアを荒々しく開けて探しにいらつしやいます。九割方は生徒会副会長のエアグルーヴさんですが、時にはファインモーションさんのSP部隊の隊長さんも困り顔でお越しになって、やんごとなきお姫様の脱走を手伝った下手人としてゴールドシップさんを追走する羽目になります。やり過ぎて国際指名手配を受けなければよいのですが。

「ちなみにお二人はどのようなご用件ですか？」

「はい……、私たちゴールドシップさんのファンでして……」

「ファン!？」

思わず一瞬固まってしまいました。あのゴールドシップさんにファンですって？ 直後、ネイチャさんに肩を叩かれ、二人してソファの陰に隠れて緊急作戦会議となりました。

「ねえ、あの感じは十中八九『きれいなゴルシ』のファンだよね？」

「おそらくは。どうします？ いつものゴールドシップさんに会わせたら一瞬にしてイメージ瓦解がかいですわ」

「一応イメージ崩壊防止のために取り繕つくろう方針でいっとく？」

「そうしましょうか」

作戦会議を終えてソファに戻り、ネイチャさんが口を開きました。

「ちなみに、ファンになったきっかけとかつて？」

「昨年のファン感謝祭で観た『伝説の木魚ライブ』です」

「今度はお姉さん風の方が答えてくれました。……え？」

「なんですって？」

「はい、あの木魚ライブで私たちの心が大きく揺さぶられまして、トレセン学園で学びたいと心を新たにしました！ 無事入学できたので、ぜひゴールドシップさんにお会いしたいと思ってこちらに参りました！」

「ア、ハハハハ……そっちのゴルシかー……」

ゴールドシップさんの奇行を取り繕う必要はなくなりましたが、今度はこちらのお二人のほうが、その、失礼ながら変わっていらつしやるのではと……。

「そこで、今日は……はい、ゴールドシップさんにファンクラブ結成の許しをもらいに、来ました……」

「!？」

「ファン、クラブ……!!」

衝撃のあまりネイチャさんと二人して固まっていると、トレーナー室の扉が勢いよく開かれました。

「イエーイ! ゴルシ様の凱旋がいせんじゃーい! ……おろ? そちらのカワイコちゃん達は?」

「生のゴールドシップさん……!!」

お姉さん風の方が目をハートにして、そのままソファに倒れ込んでしまいました。慌てて駆け寄ろうとしたところ、

「大丈夫です……キートスちゃんはいつもこんな感じなので……」

と、もう一人の方がのんびりした口調で事も無げに述べました。

「はじめまして。ユーバーレーベンと言います……」

「先ほどは取り乱しました。ウインキートスと申します」

「ふふん? 二人がゴルシちゃんのファンなんだって? 嬉しいねえ、嬉しくてタキオンの薬を飲んでセルフミラーボールになりたいくらいだぜ!」

「声だけでなく見た目も騒がしくなるのはやめてくださいまし」

「良かったねえゴルシ、若いファンの子が二人も来てくれて〜」

ネイチャさんがしみじみと話しました。ネイチャさんは同じ年頃のウマ娘よりも、年上のおば様方おじ様方のファンが多く、事あるごとに学園近所の商店街がネイチャさんにかこつけて大セールを繰り広げています。私は逆にスイーツショップを通りかかるたびに店長から泣かれてしまいました……過去のはしたない振る舞いを日々猛省もうせいしております。

「それで、私たち、ゴールドシップさんのファンクラブを結成したいと思ひまして」

「活動するなら……やはりご本人にお話しした方が良いかとー、思つて……」

「おう、いいぜ」

「！ ありがとうございます!？」

ウインキートスさんが文字通り飛び上がらんばかりの勢いでソファから立ち上がり、ゴールドシップさんに最敬礼しました。

「実はもう、ファンクラブ名も考えてきました……」

ユーバーレーベンさんがそう言いつつノートを広げました。

「G C C……?」

「ゴールドシップ・クルー・クラブです」

ドヤ顔で語るユーバーレーベンさんとウインキートスさんを相手に、私とネイチャさんはやや首をかしげていました。一方、ゴールドシップさんは目を輝かせて、

「いいねえ、アタシ会員番号ゼロ番のキャプテンな！」

「ふふ……心得ております……」

と早速盛り上がっていました。なににせよ、ファンクラブができるといのはちよつとうらやましくもあります。

「ファンクラブですか。デビュー前ではありませんが、もうファンがいるとは……」

「マックちゃんの隠れファンクラブは五個くらいあるぞ？」

「えっ？」

初耳の情報に、この日二度目の思考停止が発生してしまいました。

「アタシの知る限りだと『パクパク会』、『目白猛虎団』メジロもうちだん、『ステイヤーズクラブ』、『ニンジン叩き売り愛好会』、『テイマクてえてえ連合』だ。ちなみに全部のクラブで名誉総裁に就任した」

「……その、ファンの方には失礼かもしれませんが、なぜかほとんどの会に変な雰囲気を感じてしまうのですが……」

「ま、それだけマックイーンには魅力があるってこった。メジロの誇りだ」

「は、はあ……」

私が疎か^{うと}たっただけなのか、ファンクラブの皆様のステルス度が高かったのかはわかりませんが、ファンの皆様に恥じない振る舞いと活躍をせねばと、心を新たにしました。

「それでは……」

「失礼します!」

ユーバーレーベンさんとウインキートスさんが帰った後、ゴールドシップさんに聞いてみました。

「ちなみに、あの方々はゴールドシップさんが過去に経験してきたループでは登場したことがありましたの?」

「いや、アタシの経験の中では今回が初めてだな。なんというか、マックちゃんに対するのと同じような親近感を覚えたから、もしかしたら例の四足歩行動物が『ウマ』をやつて

た世界だと、アタシの娘だったりするかもしれないな」

「へえ……ゴルシの子ねえ……フッフ」

「想像できませんわ」

あんな礼儀正しいよい後輩達が別の世界でゴールドシップさんと親子かもしれないなんてありえません。そうに決まっています。

「ま、せっかくのファンだし、真なるゴルシ様を見せてやらねえとな」

朗らかに笑うゴールドシップさんの姿に安堵しつつ、この顔を曇らせることのないよう頑張らねば。

しばらくして、トレーナーさんが部屋に帰ってきました。

「あー疲れた。会議は三分間で終わらせてほしいもんだ。……ん？ 誰かお客さんが来た？」

「ゴルシ様のファンが二人来たぞ！」

「ファン!？」

案の定、トレーナーさんもとて驚いていらっしやいました。

「そ、なんかファンクラブを作りたいから、一応ゴルシにお伺いを立てに来たんだって。近頃じゃ珍しく律儀りつぎだねえ」

「商店街のおばちゃんか！ 七百歳のアタシよりも年上みたいになつてるぞ」

「母さんやそれこそ商店街のおばちゃんから移つちやつたのかもねえ」

苦笑いするネイチャさんを見て、トレーナーさんが口を開きました。

「デビュー前からファンがいてくれるから、ファンに恥じない走りをしていこうな」

「モチのロンよ」

チームの本格的始動まであと少し。気を引き締めて参りましょう。

第四章 チーム命名・『自重』

「今度こそチーム名を決めないといけない」

三月三十日、トレセン学園の春休みはあるようで無いようなもの、授業が休みになって
いる生徒でも、レースに出るためにトレーニングに勤いそしむ生徒は数多い。名称未定の我が
チームはまだ本格的活動を始めてはいないが、メンバー全員を招集しょうしゅうしていた。理由は最
初に宣言した通り。

「お？ チーム名まだ決まっていなかったんだっただか？」

ゴールドシップがとても意外そうな顔を見せて返事した。

「決まってるいな」

「そこに『自重』って張り出したままだから、てつきりあれで決めたのかと思ってたんだが」

「さすがにあれはいかん」

「でもアレですよ、アタシのクラスメイトもそれがチーム名だと思ってるほくって、『ネイチャー！ チーム自重に入ったんだって？ ヘンな名前うつ！』って何回か言われましてね、いやはや……」

不本意ながら変な名前が定着しつつあることに危機感を覚えつつ、他の人々の方を向いた。

「何かいいアイデアはないかな。マックイーン、ドーベル、そして……ユーバーレーベンさんとウインキートスさん……なんでここにいるのかよくわからないけど」

「ゴールドシップさんからのお招きにあずかりまして……」

「お邪魔しております！」

「よろしく。……ゴールドシップ、お茶とお菓子の用意があるから前もって教えろ」

「お茶はペットボトルを調達してきた。お菓子はそこにマックイーンの隠し財産があるか

ら使え。高級品だぞ」

「……マックイーン、別なところにまだ隠してたのか？」

「ききき記憶にございませんわ、オホホホホ」

「マックイーン、あなた……」

「ドーベル、可哀想かわいそうなものを見る目で見ないでくださいまし……」

「よし。全部お客様にお出ししよう」

「うう……」

「はい、アイデアがある人も無い人もそのホワイトボードに適当に何か書いて〜」

初手ぶん投げモード、こういうのはメンバーの自主性に任せる……というと聞こえはいいものの、単に自分たちで決めさせた方が不満が出にくいというチャチな保身策でもある。幸いにして、ゴールドシップが勝手に色々書き始めたので、後はそれに乗ってみんなが書き……書き……？

「なあネイチャ、俺の目が曇ってなければ、みんなしてスケッチやイラストを描いてて、チーム名の案が微塵みじんも出ていないようなんだが」

「あー、これはですね、アイデアが無いからせめてホワイトボードの賑やかしになれば
なー、って」

「右に同じ……」

「同じくです」

「同じです……」

「同じですわ…………」

「なんだよオメーら絵しか描いてねーじゃんまったくよー」

「ゴールドシップも三女神の像とA Iの中での姿を描いてるだけだなそれは」

アイデアが一個も出ていない。困った。

「このままじゃ本当にチーム名が『自重』になってしまうんだが」

「それでいいんじゃないやね？ おつちゃん」

「いいの？」

「だってなあ、このチーム名『自重』を変えたがってるのはおつちゃんだけだしさ」

ん？ そうだったか？ 他にもいたはずでは。そう思ってみんなを見渡すと、なぜか俺
の方を見てきた。……なんだって？

「一応聞くが、名前を変えたいと思ってる人挙手」

手を挙げたのは自分だけだった。メンバーの賛成ゼロ。あれ??

「まさか、名前を変えたいと思っていたのは俺だけだった……?」

「そのようだな。これで決まりだ、おっちゃん」

会議終了。

「みんな本当にいいのか」

「すっかり呼び慣れて、あと、みんなからも呼ばれ慣れちゃいまして……。意外と悪くないかもなって」

「嫌なことをきちんとはつきり言うダブルがそういうなら、まあそうなんだろうな……」

「私も一周回ってこれでいいかもと思いました。チーム名を呼んだり呼ばれたりするたびに自戒じかいになる気がいたします」

「商店街でうっかりこのチーム名を喋っちゃったんですけど、かなり好評でしたね。アタ

シもこれでいいと思います」

「良かったな、無事チーム名がすんなりと決まってる」

確かに揉めるよりはるかに良かったかもしれない。早く提出するようたづなさんからせつつかれていたので、早速書類を書いて理事長室に提出しに行った。たづなさんからも本当に大丈夫なのか再三確認されたけど、問題ないと答えた。理事長からは「精進ッ！」との激励を頂いた。

かくして、チーム『自重(仮)』改め、チーム『自重』が成立した。……これで良かったのか。良かったことにしよう。

部屋に戻ると謎のお菓子パーティーになっていた。メンバーの体重管理は明日以降の取り組みに回し、今日はちよつとチーム正式発足を祝うことにした。

(『黄金の船、たどり着きたる先』第二巻に続く)

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

二〇二三年春から夏にかけて書いたウマ娘小説『Trial #43 - 空位の騎士 -』が生まれるもととなった本編『訳ありなゴールドシップ』を本にしました。

もともと、二〇二三年二月下旬に博士論文公聴会が終わって、紆余曲折ありながらも審査に合格した後、文章を執筆するだけの勢いと欲望だけはありながら、いつも書いている『ご注文はうさぎですか？』の二次創作小説の執筆が行き詰まったままとなっていました。その頃、pixivで『ウマ娘プリティーダービー』のファンアート、二次創作の漫画や小説をよく読んでおり、そのうちのいくつかから着想を得て書き始めたのがこの話になります。

pixivでの作品を連日投稿して第六話「ゴールドシップが今にたどり着くまでの昔語り」に達した時、その第六話の部分（この本では第二章『ゴールドシップ、七百年目の昔語り』として収録）約二十ページを引き伸ばして三百ページ（のちに一ページあたりの文字数を変更して三百五十ページ）にしたスピンオフ作品『Trial #143 —空位の騎士—』を先に本としました。

この本をまとめる際にようやく全編のプロットを作り、おおまかな方向性が定まりました。ダレないうちに書き上げて公開したいと思います。

『ご注文はうさぎですか？』二次創作小説との並行執筆を進めていきますのでどうぞよろしくお願いたします。

麦（穀物P）

黄金の船、たどり着きたる先 一

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二三年（令和五年）十二月 一日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)